スチューデント・アパシーの下位分類の研究

教育心理学コース　下　山　晴　彦

Study on Subtypes of Student Apathy

Haruhiko SHIMOYAMA

The university students who show the specifically apathetic state and continue to avoid confronting their conflicts are generally classified as Student Apathy. But the concept of Student Apathy has not yet been defined. The purpose of this paper was to propose the hypothetical model of the concept of classification and personality structure for Student Apathy and discuss its validity. At first a student apathy case helped with tunagi model was documented to suggest the model, which consisted of following three dimensions. ①Behavioral dimension : the elements were acts of avoiding, denying, splitting. ②Psychological dimension : The elements were states of self-uncertainty, Anhedonia, time confusion. ③Characteristic dimension : The element were tendencies of obsession, passivity, independence. Next, two or three subtypes were developed and examined with Rorschach test data. It was found that the model had clinical validity.

key words : student apathy, classification model, personality structure, clinical validity

目　次

問題と目的
研究1
Ⅰ．事例研究
　1．はじめに
　2．事例の概要
　3．援助経過と考察
　4．討論
Ⅱ．分類研究
　1．はじめに
　2．行動障害の分類概念
　3．心理障害の分類概念
　4．性格傾向の分類概念
研究2
Ⅰ．予備研究
　1．はじめに
　2．既存の下位分類の問題点
　3．下位分類研究法の問題点
　4．下位分類研究の課題
　5．人格構造モデルについて
Ⅱ．下位分類研究
　1．はじめに
　2．事例の選択と要約
　3．下位分類の作成と検討
　4．ロ・テストによる検討
　5．ロ・テストの全体傾向による検討
全体討論

問題と目的

学生の留年は，自己確立のための猶予期間としてのモラトリアムとみることもできる。しかし，留年学生の一部には，単なるモラトリアムではなく，学業に対して慢性的な無気力状態に陥り，関係者の警告にもかかわらず，休学，留年を繰り返し，結局は退学になっていく場合がある。具体的には，真面目な男子学生が，ある時から急に授業に出席しなくなり，学業に関する意欲を失い，試験を受けない（受けられない）状態が慢性化する。しかも，妄想，抑鬱，不安などの顕著な精神症状がみられず，本人も自らの状態を深刻にとらえることができないので，一見すると“さぼり”や“怠け”とみ間違われる。しかし，その無気力状態を自らの意志で改善することは全く不可能であり，単なる怠け，さぼり，あるいはモラトリアムといった一時的な不適応状態とは異なる。このような事例は，1970年頃より全国の大学の学生相談・精神保

健関係者によって指摘され，高学歴社会の新たな青年期の病理としてスチューデント・アパシー（以下，S・A）と命名され，その後増加傾向がみられつつ今日に至っている。

S・Aに関しては，これまでWalters（1961），笠原（1984），山田（1987），土川（1990）等によって臨床的研究がなされている。しかし，湊（1990），松原（1993）がまとめているように，個々の論者によって状態像，形成因，障害レベルといった概念が異なっており，分類基準の混乱がみられる。ところが，このように分類基準が未確定であるのにもかかわらず，多くの研究者によって下位分類の試案も出されており，それによってさらに概念の混乱が生じ，S・Aの臨床単位としての輪郭が非常に曖昧となる事態となっている。

そこで，本論文では，まず研究1で筆者の臨床研究および文献研究に基づいてS・A概念の分類，整理を行い，分類概念モデルとして新たに3次元構造モデルを提案する。次に研究2では，3次元構造モデルの内容を満たすことを条件として分類された典型例20事例を分析し，下位分類の可能性を検討する。

なお，筆者は，これまでS・Aの概念が不確定であったのは，適切な援助技法が未開発なためにS・Aに関する情報が十分に得られていなかったことによると考える。したがって，援助方法研究と分類概念研究とは切り離せないものと考え，援助方法研究と分類概念研究を相互に関連させ，両者を循環的に発展させていく方法をとった。具体的には，新たな援助モデルの適用によって明らかになる情報を障害の概念モデル形成において重視するとともに，概念モデルの形成の際には援助モデルの開発に有効な視点を提供できるような障害の分類を行うことを試みた。

研究1

Ⅰ．事例研究

1．はじめに

S・Aの障害を整理し，その基本的構造を推定するために事例研究を行う。以下に示す事例は，筆者が大学の学生相談所に常勤臨床心理士として勤務して約4年経た時点で担当した事例である。既述したように概念に関しては各論者で差異がみられるが，本事例は，いずれの論者の概念でもS・Aに分類される典型的な障害を示しており，S・Aの基本構造を推定するうえで適切な事例である。

また，筆者は，勤務を初めて4年の間に多くの事例でS・Aの心理援助に関しては通常の心理療法モデルでは限界があることを痛感し，本事例を担当した時期には，「つなぎ」モデル（下山，1987）という新たな援助モデルを適用し始めていた。そのため，この時期は，心理療法モデルと「つなぎ」モデルの違いを意識し，「つなぎ」モデルがS・Aの個々の障害に対応できるように，援助方法との関連でS・Aの障害の分類，整理を試みていた時期でもあった。特に本事例は，心理療法モデルと異なる介入をしたことで，S・Aの障害を3次元に分けて分類する視点が得られるきっかけとなった事例である。本事例で示唆されたS・Aの分類概念の枠組みは，その後に担当した複数の事例でも同様のパターンがみられ，S・Aにある程度共通してみられる構造であることが認められた。また，障害を3次元で分類することは，「つなぎ」モデルの援助仮説を明らかにしていくうえでも有効な視点を提供できるものであることも認められた。

このように本事例では，援助方法との関連でS・Aの障害を整理し，確認する作業が意識的になされており，S・Aの分類概念モデルの臨床的モデル生成過程を示すのに適切であると考え，研究事例として採用した。

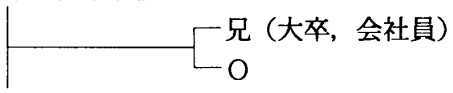
2．事例の概要

(a) 当事者：O君　大学入学後5年目の3年生，22歳，工学部

(b) 来談まで：大学入学1カ月後より単位さえ揃えばよいと考え，語学以外の授業には出なくなる。2年時に，やる気をなくして留年。専門過程進学後も面白くないということで留年。入学2年目後半よりほとんど授業に出す，下宿でテレビをみたりして過ごす生活が2年半続く。休学をしようとしたところ，担当のB教授よりカウンセリング・センターを紹介され，来談。

(c) 家族構成

父親（会社員）



母親（高校教頭）

3．援助経過と考察

＃1（×1年6／30）：「教授に言われたから来た」ということで自発的な発言はなく，来談までの経過についての私の質問に対して上記の内容を受動的に応えるだけであった。「勉強はやる気しない。昼まで寝ている」と語り，〈今後どうしたい〉との私の質問には「わからない。大学にくる気は全くしない」と応える。また抑うつ，食欲低下については「特に

ない」，不安については「これからどうなるかという気持ちはあるが，そんなに強くはない」と他人事のように淡々と語る。私としては，現在の専門の適性の問題もあるかと考え，文系への転学を含めて希望をきいたところ，「今はわからない。夏休み明けてから考えたい」と判断を回避した。相談の継続についても「やる気がない」と消極的であった。相談意欲が乏しいので，取り敢えず関係をつないでおくことを考えて，ロールシャッハ・テスト（以下ロ・テスト）の施行とK教授への報告のための教授，O，私の3者面接を求めたところ，それについては承諾した。

〔考察〕

会ってみての印象としては，受動的ではあるが，礼儀正しくきちんとしており，特に病理的な印象は受けなかった。昼夜逆転はみられたが，不眠というわけでもなく，ただ学校場面を回避しているだけの状態であった。これは，各論者がS・Aの基本障害とする退却（＊論者によって用語は異なる）に相当する。また2年半以上も大学を回避しているにもかかわらず，焦り，不安，抑うつはなかった。ただし，健康的というわけでもなく，「やる気がない，面白くない」と繰り返し語り，将来については「わからない」と現実感，実感がなく，このままでは改善がみられないのは容易に推測された。

「やる気がない，面白くない」というのは，Walters (1961) が「情緒的動きの減退，情緒的引きこもり，知的無力感，空虚感」という語で，笠原 (1981) が「アンヘドニア」という用語で指摘したS・A独自の無気力の障害である。また将来について「わからない」というのは，笠原 (1978) が進路喪失」，山田 (1987) が「自己不確実」という用語で指摘する自己決定の障害である。さらに，昼夜逆転し，生活のリズムが乱れ，明日の予定もたたない状況で，湊 (1990) が「時間的展望の拡散」，土川 (1985) が「生活リズムの変調」と指摘する状態も生じていた。

このようにS・Aの典型的障害を示したので，初回時点でS・Aとの見立てをもった。次は援助技法であるが，Oの場合も，土川 (1981, 1990, 1992)，林 (1990) がS・Aの特徴として指摘しているように相談意欲がなく，来談者の自発性を前提とする従来の心理療法モデルによる対応では来談継続は不可能であった。

ところで，勤務当初，私はS・Aに対しても無理に心理療法に持ち込もうとして，結局は中断が繰り返された。私は，当惑し，次第に臨床心理士として無力感を経験するようになった。このような経験を重ねるうちに臨床心理士として私が経験した当惑はS・Aの障害と密接に結びついており，したがって，その当惑こそがS・Aの障害を理解する手掛かりになることに気付くようになった。それと同時にS・Aに対しては心理療法の発想とは異なる技法をもって対応をしなければならないことも次第に意識するようになった。その際，技法はS・Aの障害に適切に対応していなければならないので，技法の開発と障害の同定を循環的に進めなければならなかった。

Oの初回面接の時点で私は，上記臨床経験から次のように援助方法に関する作業仮説をたてた。S・Aの主障害が無気力で，しかもアンヘドニアという心理状態は自我親和的であるので，本人が敢えてそれを取り除く必要を感じないのは当然である。したがって，Oが自己の心理状態を見直すといった抽象的で骨の折れる作業である心理療法を望まないことをまず前提としなければならない。そこで，ロ・テスト施行と教授への報告という具体的課題を提示し，援助モデルとして「関係をつなぐ」こと（「つなぎ」モデル）を採用とした。

＃2（7／1）はロ・テスト実施。本人の感想は「面白かった」とのこと。

＃3（7／10）は20分遅れての来談であったが，悪怯れた様子はなく，むしろ人なつこい表情で入ってくる。ロ・テストの結果として〈エネルギーの低下。情緒的反応の少なさ。客観的である反面，想像力の低下等〉を具体的反応に即して説明したところ，「当たっている。大学入学直後は映画を観たり，運動サークルに入ったりしたが，2年目にサークルを辞めた頃から何もしなくなった。何故かわからない」と語る。家族関係を尋ねたところ，「父親は尊敬していない。ほとんど話をしない」との応えであった。〈教授との3者面接の際に転学のことを話してみてはどうか〉との私の提案に対しては，「いいですよ。でも，自分はそんなに深刻には考えてませんよ」と他人事のような反応であった。また，面接を続けてはどうかとの私の誘いには沈黙して反応をしなかったので，〈強制ではない。話すことがなければ考えてこなくてもいいし，休んでもいい〉と伝えたところ，「それならやります」とのことであった。

＃4（7／10）は3者面接。私がK教授に「病気ではないが，スチューデント・アパシーという状態で意欲が低下している」と説明し，今後の対応を話し合った。Oが「転学部の可能性も考えたい」と発言し，B教授も「O君がやる気になるなら協力する」と述べ，転学先については私との面接で検討することになった。

〔考察〕

これまでの状況やロ・テストの結果からも事態の深刻さを認識できるはずであるが，Oは「深刻には考えていませんよ」と深刻さを否定している。私はS・Aにおいてはこのような深刻さの否認がみられることは承知していたので，作業仮説としては，心理療法によって現実に直面させることよりも本人が安心できる環境設定を優先することにし，3者面接を行った。しかし，土川 (1981) が「ニソニソ仮面」と表現した面接場面における不自然な愛想のよさと，その裏腹のいくら話しても深まらない情緒的交流の希薄さや他人事のような冷淡な態度に対して，私自身ある種のやりきれなさを感じていたのも事実

である。援助の方針として，私は早い時期から「転学」を考慮し，半ば奨めてもいる。これは，Oの深刻さの否認に私が無意識に反応してしまい，否認されている深刻さを私が肩代わりして安易な現実的解決を焦っていたとみることができる。また，Walters (1961) や佐治 (1976) は，S・Aの受身的態度を受動的攻撃性とみて，カウンセラーはその挑発にのらないことの重要性を指摘している。私は，この点にも注意していたつもりであるが，主体的に自己の心理的問題に取り組まないOに苛立っていた面もあるかもしれない。

次回面接予定であった9／7は，来談せず，連絡もなかったので，私の方から電話を入れ，面接を1週間後に約束した。

＃5（9／14）は1時間遅れでやってきた。「寝過ごした」とのことで，「この1カ月はウエイターや食品販売店でアルバイトをしていた」と淡々と語る。〈転学部をするためには転学先の授業に出てみる必要がある〉と伝えると「特にやりたいものがない」と言うので，転学受入れをしている学部，学科の資料を紹介し，一緒に検討した。その結果，教育関係の学科がよいということになり，今後は授業に出てその内容を検討することとなった。

しかし，その後予約日に来ず，2カ月の間，連絡がないまま来談がなかったので，私から11／17に連絡し，翌日に面接の約束をした。

＃6（11／18）も遅れて来談し，「アルバイトはしているが，授業には全く出ていない」と悪怯れずに語る。〈今後どのようにしたいのか〉との問いには「転学したい」と応えたので，〈授業内容を知った上で転学先の教授に意欲を伝えられなければ，転学はできない〉と話したところ「じゃあ来週から出ます。時間割り見せて下さい」との応えであった。

＃7（11／25）は，「アルバイトで疲れて授業には出ていない。でも，転学はしたいので，本は借りてきた」と言う。しかし，「来週から友人とスキーに行く」とも語り，一貫性がない。また面接場面でOは自発的に発言することはなく，私の具体的な質問に応えるだけで自己の考えや気持ちを語ることがなかった。そこで，Oの心理状態を間接的に知ることともに，Oとの間で情緒的な関係を創るきっかけになればと考えて絵物語法（下山，1990）を提案し，了承が得られたのでPRT版（小嶋他，1978）で実施した。

絵物語①（N7a）「友人におとしめられて罪を犯し，捕まって牢屋に入れられた。有罪になり，死刑になる予定。羨みながら外を観ている。その友人に色々してあげたのに裏切られた。憎しみよりも虚しさを感じている」〈動けなさ，不信感が伝わってくる〉と私の感想を伝えたところ，「人間を信頼してないところあります」との応えであった。

なお，授業に出るきっかけとなればと考え，カウンセリング・センター内の懇話室という学生の溜り場にいた教育関係の女子学生（私のクライエントでもある）にOを紹介し，授業内容の説明をしてもらった。その結果，その女子学生の出

〔考察〕

約束していたのにもかかわらず，都合の悪い場面には来談しない，授業に出ないといった回避行動を繰り返し，しかもそれについて反省することもないOの行動は，人格の一貫性が感じられないという意味で分裂（スプリット）した行動であった。しかも，その分裂は，境界例人格障害のように情動的表出をともなう分裂ではないため，援助者の側には分かりにくかった。その結果，その時の援助者には，自分勝手なOに振り回されているという被害感が生じてきて，早くかたをつけたいという気持ちが強くなっていた。援助者が，かなり強引に転学の方向で動いたのは，援助者の側にこのような逆転移感情が生じていたことによると考えられる。ただ，「絵物語」の内容において面接場面で感じていた情緒的交流の希薄さと通じる他者への不信感が読み取れ，Oの回避行動の背後にある警戒心が伺われ，援助者の側の被害感が少し和らいだということはあった。

＃6（12／2）は「授業には出た。分かるような気がするので，転学したい」と語る。日常生活については「ビデオやTVをみている。時々知人と麻雀をする」とのことであった。

＃7（12／10）は「授業に出た。地域のネットワークの話が面白かった。自分は昔から上から押しつけられる教育いやだった。L先生が教育は暴力だと言ったのは分かる。来週L先生に転学の相談にいくつもり」と語る。

しかし，次回予約日に来ず，その後1カ月連絡ないまま来談しないことが続いたので，私から電話を入れたところ「L先生は転学を受け入れてもいいと言ってくれたが，教養課程の成績が低く，転学の条件を満たしていないので，転学は不可能であることがわかった。もう，相談も行く必要もないと思っている」とのことであったが，「今後のことを話したいので一度来てほしい」と伝え，来談の約束を取り付けた。その後，私から転学希望先の学部の事務に問い合せたところ，成績は絶対条件ではなく，教官の推薦があれば転学も可能との返事を得た。

＃8（×2年1／19）に，そのことを伝え，〈L先生，B先生に相談に行くように〉と言ったところ，「ありがとうございました」と嬉しそうであった。さらに〈親と会いたいのだが，どうか〉と尋ねたところ，「親には関わってもらいたくない」とのことであった。

1／26にはL教授から私に電話があり，「O君のことは迷っている。他によい受入先があればとも思う」と言われたので，これまでの経緯を話し，〈現状では他に適切な転学先はない。指導教官のB先生も転学は認めている。ただ私としては転学して無気力状態がよくなるという保証はできない〉と伝えたところ，「B教授に連絡してみる」とのことであった。翌日，L教授より「O君を学科として受け入れることになった」との電話があった。

＃9（1／27）は，具体的な転学の手続きの話であった。

＃10（2／3）には，転学が決まったとの話があったので，高校時代の進路決定について尋ねたところ，「わからなかったので考えなかった。大学に入ってから考えればよいと思っていた」とのことであった。転学決定後の心理状態を知りたいということもあり，了承を得て絵物語法を行った。

絵物語②（N-18a）「現金強盗の犯罪者が砂漠に逃げ込んだ。車が動かなくなった。近くに動物の死骸がある。四苦八苦して車を直して逃げ出した」と語るが，「どうも不自然ですね」と言って「車を捨てて食料を持って歩きだす。草などを食べて逃げおおせ，助かる」との修正を加えた。〈閉じこめられている感じは，前の物語にも通じる〉と私の感想を伝えたところ，「その感じはずっとあった。学校とか親に閉じこめられている感じ。父親は，僕が真面目な話をしようとしても逃げた。母親はもっと狡。学校の管理職で自分のペースでしか話

さない。話してもしようがない，自立すればいいと思っていた」と語る。

その後，来談することになっていたが，来談せず，連絡もなかった。転学前にOに紹介した女子学生の話によると，Oは転学後も結局は授業に出ない状態が続いているとのことであったが，私からOに連絡を取る気にはなれず，以後接触はない。

〔考察〕

Oは，一時転学が不可能となった時点で容易に相談の必要はないと判断した。私は，このような必要がなくなれば簡単に関係を切ってしまうOの態度から，彼の人間的つながりの希薄さを改めて感じてやり切れない気持ちがさらに強くなった。転学決定後Oは来談しなかったが，私としては，このやり切れない感じをもうこれ以上味わいたくないという気持ちが強く，連絡を取る気にならなかった。この援助する側に生じてくるやり切れなさについては，Walters (1961)，土川 (1990, 1992) もS・Aに援助的に関わる場合にはかならず生じてくると述べており，S・Aとの援助関係における特徴的な逆転移反応といえる。

上述したように，援助者のやり切れない気持ちは当事者の人間的つながりの希薄さと関連していたが，この希薄さは絵物語②によく示されている。「砂漠で車が故障」という状況は，自己の方向が分からずに途方に暮れ（自己不確実），生命の潤いのない無味乾燥な世界（アンヘドニア）にいるという意味でOの心理障害を示しているともいえる。しかし，誰もいない砂漠で誰にも助けを求めずに逃げおおすというストーリーは，Oの情緒的人間関係の希薄さをよく表している。したがって，S・Aとの援助関係を維持し，人間的なつながりを形成するためには，まずその前提として臨床心理士がS・Aのこのような砂漠的な関係の在り方に耐えられなければならないといえる。

4．討　論

約7カ月の心理援助期間において心理療法モデルとは異なる対応によって転学をやり遂げはしたが，これでよかったのかという疑問は残る。もちろん，もし，心理療法モデルで対応していたならば，Oと私との関係は続かず，Oは来談当初の学部に在籍したまま，留年，休学を繰り返すことになったことは容易に想像がつく。しかし，援助過程を振り返ってみると，関係をつなぐという，心理療法モデルとは異なる方法をとったにもかかわらず，行動面の調整に追われてしまい，Oの心理的側面にはほとんど触れることができなかった。結局本質的な点での変化はなかったという思いが強い。心理面の障害としては，当初から語られていたように，何をやりたいのか分からないという自己不確実感，何もやる気がなく，面白くないという活気の乏しさ（アンヘドニア），予定がたたず，昼夜逆転の生活を繰り返すという時間拡散がみられた。しかも，それらの障害は，本人が自己の問題として意識することはなく，決して自我異和的な葛藤や苦悩とならないという特殊な特徴をもつ心理障害であった。

S・Aは，このような特異な心理障害を示す障害であるので，関係者の調整をして環境を整えるという単なるコンサルテーションに止まり，心理障害への介入ができなければ，心理援助としては十分とはいえない。

そこで，本事例で心理障害に介入できなかった理由を考えてみると，まず第1に本事例の心理障害が自我親和的な特殊な障害であり，本人自身が問題と感じていないため介入の対象となりにくかったことがあげられる。しかし，それだけでなく，第2の理由として否認や分裂といった行動障害を含む回避行動の繰り返しによって援助する側の私の心理状態が不安定となり，心理障害を扱う意欲がなくなっていたことがあげられる。さらに，第3の理由としては，私がOとの間で感じた関係の希薄さということがある。Oは何らかの不都合な状況が生じると容易に関係を切ってしまうので，私は最後まで彼との間に人間的なつながりを感じることはなかった。そのため，彼の人間的な側面，つまり心理的な側面に触れるための糸口が見いだせなかった。

ところで，このようなOの人間的なつながりの希薄さは，彼の性格特徴と密接に結びついていた。常にきちんとしていたいという，ある種の完全癖（強迫性）があった。そのためOは，自分が非難されるような都合の悪い状況を選択的に回避した。またOは，自立志向が強く，人に自分の弱みを語り，情緒的に依存することは決してしなかった。それは，絵物語において窮地に追い込まれても決して他者に頼ろうとはしないことに表れている。しかし，Oは，基本的には受動的で，自己主張をして他者と対立することはなく，むしろ他者に協調的でもあった。今回の転学についても一貫して受動的であったし，親子関係でも不満があるにしろ，親と対立することはなく，親からみれば適応的でよい子に映っていたと思われる。このように弱みを見せずにきちんとし，しかも受動的であるといった性格が，自らの不適応を認めなければならない状況においても，自己の弱みを否認し，「ニソニソ仮面」といわれる奇妙な愛想のよさを示しながら決して心を開いて自己を語ることのない不自然な協調的態度に表れていたと考えられる。

以上みたように行動障害，心理障害，性格の問題が相

互に関連しながら援助者である私が心理障害に介入することができない状況が形成されていた。したがって，S・Aの心理援助の有効な実践モデルを構成するためには，まずS・Aの障害を行動，心理，性格に分類して，その内容を整理し，それぞれに対応する援助技法を開発する必要があることが明らかとなった。また，今回の事例でも明らかなようにS・Aの場合，人間的つながりを形成することができず，そのために心理障害への介入の糸口が閉ざされたままになり，取りつく島がないという状態となる。したがって，S・Aの心理援助においては，単に周囲の者との関係をつなぐだけではなく，行動障害や性格の問題を見極めながら援助者と当事者との人間的つながりを創っていくことが重要となることも示唆された。

II．分類研究

1．はじめに

上記事例研究で示したようにS・Aの障害を行動，心理，性格の3次元で分類することで，葛藤場面を回避する行動障害のため援助者が心理的に動揺させられ，また人間的つながりを拒絶する性格の偏りのため援助的関係も形成できず，しかも当事者が葛藤を感じない心理障害のために介入の対象が不明確というS・Aの心理臨床援助における困難さを明らかにすることが可能となった。このような心理援助の難しさは，上記事例以外の場合でも同様のパターンが認められ，3次元の分類はS・Aに共通する障害の構造であることが臨床的に推測された。

このように臨床実践においてS・Aの障害の3次元分類の有効性が明らかにされたが，この分類は，混乱していたS・Aの概念を整理し，統合的な分類概念を構成するのにも有効であると考えられた。特に，障害を3次元とすることで，それぞれで異なる各論者の指摘を3次元の構造のなかに収め，全体としてまとまりのある統合的概念を構成することが可能となると考えられた。そこで，S・Aの概念モデルとして筆者の臨床経験を基づき，3次元の分類概念を構成することとした。構成に際しては，これまでのS・A研究を参考とし，なるべく多くの論者の見解を取り入れた統合的内容とすることを心掛けた。

なお，筆者は，この時点での概念研究を探索段階の研究と位置付け，構成する概念モデルを，あくまでも実践型研究におけるモデル生成のための仮説モデルとみなしていた。上述したように分類概念は，心理臨床援助の経過を見定めるための有効な視点を提供するものであり，分類概念の改善は援助モデルの改善とも密接に関連していた。したがって，この時点での分類概念を仮説モデルとして心理臨床実践を行い，概念の修正を繰り返し，実践モデルとしての完成を目指すことはS・Aの援助モデルの完成のためにも必要であった。

以下，仮説モデルとして構成した分類概念をTABLE 1～3に示し，概念作成において参考とした先行研究の紹介と概念の解説を行う。

2．行動障害の分類概念

TABLE1に示すように行動障害の分類概念は，回避，

TABLE1　行動障害の分類概念

回避 困難が予想される状況（例：失敗する。恥をかく。責められる等）を回避し，葛藤場面に直面しない。ただし，全面的に現実から解離してしまうことはない。日常生活において，一日中ボーとしていたり，昼夜逆転したりすることもあるが，本人が脅かされない事柄（例：パソコン，ゲーム，パチンコ，アルバイト等）については優れた行動力を示すことがある。 ＊精神分裂病のような現実感の喪失やうつ病のような生活能力の低下はみられないので，病的には見えない。 ＊場面回避であり，日常行動は障害なく行うので，周囲の者は，あれだけの行動力があるのにどうして学業ができないのかと苛立たされる。
否認 自らが陥っている困難な状況に関して，その事実経過は認めても，それを自らが対処していかなければならない深刻な状況として受けとめ（られ）ない。 ＊自らが援助や相談を求めてくることはない。教官，事務官，親に問題を指摘されて，半ば強制的に相談機関に紹介，あるいは連れてこられる。 ＊問題を指摘しても，深刻さがなく，他人事のように反応する（例：「何とかなりますよ」）ので，周囲の者が拍子抜けしてしまう。
分裂 他者との間で問題解決のための行動をとることをすんなりと（安易に）約束する。しかし，授業に出なければならない，試験を受けなくてはならないといった困難な状況に実際になった場合には，以前と変わらない回避行動を繰り返す。しかもそのような一貫性の無い行動をとったことを反省できず，何回も同じ事を繰り返す。 ＊自らの行為に対して責任をとることがないので，本人は悩まない。 ＊安易な約束と回避行動の繰り返しといった一貫性の無い分裂した行動を繰り返すため，周囲の者が悩まされる。

否認，分裂によって構成されているとした。以下において，関連研究を示し，概念の解説を行う。

「退却」(笠原，1978，山田，1987)，「おりる」(石井，1981)，「撤退」(土川，1990) と論者で表現は異なるが，いずれの論者もＳ・Ａには独特な現実回避行動がみられることを指摘している。また，いずれもその回避行動をＳ・Ａの最大の特徴としており，回避がＳ・Ａの主要な判断基準となる障害であることは，既に共通認識となっている。ただ，笠原が部分的退却をＳ・Ａの中核障害とするのに対して，山田は選択退却（笠原の部分的退却に相当）と完全退却（生活全般にわたる退却）は相互流動的であるとしており，見解の相違はみられる。しかし，完全退却といっても精神分裂病やうつ病のように現実生活が不能となり，現実から解離ないしは離脱してしまうといった病的な状態とは明らかに異なる。予想される困難の程度に合わせて部分的ないしは完全に状況を避け，その困難が回避されたならば現実に戻るという点では，選択退却でも完全退却でも同様の防衛メカニズムが働いている。このような防衛機制を表す専門語としては既に回避という用語があり，しかも，回避は日本語の日常語としては退却や撤退よりは自然な表現である。また，笠原 (1981) は，Ｓ・ＡとＤＳＭⅢの回避性人格障害 (Avoidant personality disorder) の共通性を指摘しており，その点からも回避が用語としては適切であると思われる。そこで，本論文では用語の混乱を避ける意味でも回避という語で統一することとした。

このＳ・Ａの回避が単なるさぼりや怠け，あるいは逃避といった日常的な行動とは異なる特殊な行動障害となる理由は，それが否認や分裂といった原始的防衛機制を伴う行動障害だからである。Ｓ・Ａの事例研究論文のほとんど全ての場合，面接時の印象として上記事例研究と同様に自己の困難な状況を他人事のように語るとの記載がみられる。土川 (1980) の造語である「ニソニソ仮面」も，深刻な現実とは裏腹に不自然な愛想のよさを示すＳ・Ａの行動をよく示す表現である。笠原 (1984) は，このように深刻な状況を自己の現実として認識し，対応しないＳ・Ａの行動障害は否認の防衛機制によると指摘する。

さらにＳ・Ａでは，他者とその場その場で現実への直面を約束しておきながら，容易に現実回避を繰り返し，しかもそのことに責任を感じることもないといった，人格の一貫性が感じられない行動を示すことが多くの研究で指摘されている。笠原 (1984) は，回避を繰り返しても平気でいるＳ・Ａの態度を称して「ヌケヌケ」と表現しているが，そのような一貫性のない行動の背後には分裂 (Splitting：笠原 (1984) はこれを分割と訳している) の防衛機制がみられることを指摘している。

多くの研究成果を踏まえて概念の再検討をしている土川 (1990) も，Ｓ・Ａの回避は否認と分裂のメカニズムによるとした上でＳ・Ａの障害レベルを人格障害と位置付けている。そこで，Ｓ・Ａの行動障害をTABLE 1 に示した回避，否認，分裂とすることは，これまでの研究とも一致しており，妥当と考えられる。

ところで，これらＳ・Ａ特有の行動障害は，笠原・成田 (1979) が「陰性の行動化」と述べているように，派手な情緒表出や対人関係を伴う境界例の行動化と違い，周囲の者にはそれとわかりにくい。しかし，否認や分裂は障害の重い行動化であるので，TABLE 1 にも示したように周囲の者は，その陰性の行動化に反応して知らず知らずのうちに無力感，あるいは不快感や苛立ちといった感情を引き起こされ，Ｓ・Ａとの間でさまざまな対人関係のトラブルが生じることとなる。したがって，援助モデルの形成という点からも，そのような対人関係のトラブルを引き起こさないために否認，分裂を含めた回避の行動障害を明確化しておく意義がある。

３．心理障害の分類概念

TABLE2に示すように心理障害としては，自己不確実，アンヘドニア，時間拡散をあげたが，これらはいずれも本人が自己の心理的問題として意識することがないという特殊な性質をもつ。したがって，これらの心理障害は，行動から推測し，質問や心理テストによって引き出すことはできるが，本人がこれらの心理的問題を主訴として来談することは，まずない。

自己不確実に関しては，山田 (1987，1989) がSchneiderの概念を援用し，自己不確実状態 (Selbstunsichere Zustand) をＳ・Ａの準備状態としている。山田は，この自己不確実の要因として学業偏重や受験期固着をあげる。しかし，特に学業に偏重していなかった学生でもＳ・Ａとなることから，それが唯一の要因とは思われない。むしろ，筆者の臨床経験では，自らの内的欲求の基づいて自己決定するという発想に乏しい傾向がＳ・Ａには共通してみられ，これが自己不確実の要因となっていると思われる。既発表の事例研究で記述されているＳ・Ａの自己不確実のほとんどは，対立する複数の欲求が葛藤を起して混乱する欲求葛藤型自己不確実ではなく，上記事例研究でも示した「そもそも何をやりたいかわからない」という欲求不明型自己不確実である。Ｓ・Ａが必ず躓く進路決定は，このような自己不確実者にとっては最も苦手な課題である。このことからも，自己不確実の背後には自己の内的欲求の欠如の問題が伏在していることが推

TABLE2　心理障害の分類概念

自己不確実 自分が心からやりたいことを意識できない。基本的に自己の欲求という発想がないため，自己の欲求がないことさえも自覚できない。周囲の期待や批判に敏感に反応するが，内的欲求に基づく自己主張や自己決断が求められる場面には対応できない。 ＊進路決定は，自己決断を求められるものであり，最も苦手な課題である。 ＊内的欲求が希薄なため，異なる欲求間の対立である心的葛藤も生じない。したがって，自己不確実感は，アイデンティティの葛藤とはならない。
アンヘドニア やる気がしない，面白くないといった状態が慢性化し，意欲の減退がみられる。生き生きとした快感覚が失われ，活気が乏しくなっている。しかし，不安，抑うつ，離人感とは異なり，苦痛や違和感がないので，心理的問題として自覚されることはない。 ＊いわゆる精神症状ではないので，神経症，鬱病（抑うつ状態）とは異なる。 ＊自我親和的状態であるので苦悩とはならず，自発来談，来談継続が難しい。
時間拡散 一日中ボーとしているなど張りのない生活をしているにもかかわらず，焦りを継続してもつことはない。昼夜逆転となり，生活のリズムが狂い，将来計画だけでなく，翌日の予定もはっきりしないといった，時間的展望が拡散した状態が続く。 ＊過去，未来という時間的展望のなかで自己を見直すことがないので，自己の行動を反省できない。 ＊時間の管理ができないので，約束を守ることが難しい。

測される。このようにＳ・Ａの場合，内的欲求に基づく自己決定という発想がないだけに，自己不確実であっても本人は，特にそれを自己の心理的問題として意識することはないという特異な状態が生じる。

ところで，笠原（1978）は，Ｓ・Ａの進路喪失をアイデンティティの葛藤と記述しているが，上述したようにＳ・Ａでは葛藤はみられないので，この表現は不適切である。アイデンティティの語を用いるならば，葛藤ではなく，拡散とすべきであろう。アイデンティティの概念については，アイデンティティの葛藤，危機を乗り越えて成人期への人格構造の転換を成し遂げるとの図式が含意されている。ところが，青木（1988）が詳述しているようにＳ・Ａは，成人期への構造転換というイニシエーションの図式とは全く異なる世界に生きていることが最大の問題である。したがって，Ｓ・Ａの自己不確実とアイデンティティの葛藤や危機とは異なる概念であり，Ｓ・Ａに安易にアイデンティティの葛藤概念を当てはめるのは適切ではない。むしろ，このイニシエーションができない背景としてある内的欲求の欠如という特異な状態を見極めていくことが，日本の独自な青年期の在り方とも関連して重要となる。

アンヘドニア（Anhednia）は，Walters（1961）が「情緒的動きの減退，無気力，無関心，知的無力感，肉体的気怠さ，空虚感，情緒的引き篭もり，社会的参加の欠如」という語で示した独特な無気力状態を的確に表現できる概念として笠原（1981）が援用した用語である。笠原は，アンヘドニアを快体験の希薄化とし，具体的には「何をしても本当に楽しいという感覚がない」といった，生きる喜びの実感欠如と説明している。アンヘドニアの概念を適用することでＳ・Ａの無気力が不安，抑うつ，離人感といった既存の精神症状とは異なる特異な心理障害であることが明確となる点でアンヘドニアはＳ・Ａの分類基準として非常に重要である。また，山田（1987，1989）を始めとして笠原以外の多くの研究者もアンヘドニアをＳ・Ａの症状として論じており，この点からもアンヘドニアを主要な心理障害とする必要が認められる。

ところで，笠原（1981）は，アンヘドニアが最も多くみられるのは境界例であると述べている。しかし，境界例の場合は，下山（1995）も示すように自らの快体験の欠如や生の実感のなさを意識し，その苦しみに耐えられずに手応えを求めて行動化を繰り返す。しかし，Ｓ・Ａでは，自らの快体験の欠如や生の実感のなさを自発的に訴えることはなく，それを指摘しても自己の問題として意識することは少ない。したがって，Ｓ・Ａにおけるアンヘドニアは，自我親和的で本人が自己の問題として自覚することがない点で特異な心理障害となっている。

時間拡散については，日本のＳ・Ａの事例研究のほとんどで昼夜逆転が生じ，生活のリズムが狂うとの記載がされているが，これをＳ・Ａの特徴として指摘したのは土川（1985），湊（1990）である。Erikson（1959）もアイデンティティ拡散のひとつとして時間拡散をあげており，これは，青年期の心理障害でしばしばみられる状態ともいえる。しかし，Ｓ・Ａの場合，将来に向けての時間的展望の拡散だけでなく，数日先の時間管理もできないその日暮し状態となっており，しかも本人は一向にそれを改善しようとの意欲をもたないといった特徴がある。また，過去－現在－未来の時間軸において同一の自己と

TABLE3 性格傾向の分類概念

強迫性 病的な強迫症状はなく，几帳面，律儀，凝り性といったやや硬い性格で日常場面ではまじめで礼儀正しく，きちんとした態度を示す。困難な状況に直面した場合は，自らの失敗を認めない防衛的完全癖となり，融通性の無い対応を繰り返す要因となる。
受動性（適応性） 他者に対しては協調的で，自己主張的行動をしない。周囲の期待に順応してきた適応的な生活史がみられる。困難な状況に直面した場合には，順応性，協調性が受動性となり，困難を回避するという消極的方法を繰り返すだけとなる。
自立性（自己愛性） 適応的で自立している自己像に固執するため，自己に対しての否定的評価や非難に敏感に反応し，自立適応的な自己像が保てない場面を先取りして回避する。困難な場面でも自立性に自己愛的に固執し，他者に対して情緒的に依存することはない。

いう意識が曖昧となっており，それが自己の責任を曖昧にする否認や分裂といった行動障害を引き起こす要因となっているとも推測され，その点で時間拡散は重要な心理障害である。

4．性格傾向の分類概念

TABLE3に示すように性格傾向の分類概念として強迫性，受動性，自発性を取り上げた。以下において，関連研究を示し，概念の解説を行う。

笠原（1978）は，S・Aの性格として「優勝劣敗への過敏性」をあげる。しかし，筆者の臨床経験からは，優勝劣敗よりも「他者からの批判に対する過敏性」とした方が適切であると思われる。その理由は，S・Aには笠原（1978），土川（1980）を始めとして多くの研究者が指摘する「常にきちんとしていようとする」完全癖，つまり弱力型の強迫的性格があり，それが他者に批判や非難される「きちんとしない」事態は認ないとする傾向を生じさせていると考えられるからである。

S・Aにとってきちんとしている状態とは，他者の期待を先取りし，常に適応的である状態である。他者の期待に合わせるという点は，S・Aの受動的性格の表れである。笠原（1977）がS・Aを「真面目人間の無気力」と称しているように，S・Aの学生は真面目で適応的生活史をもち，その多くが山田（1987）が学業偏重と指摘するように学業面で優秀な成績を修めている。その点で日本の学歴偏重の教育システムのなかで周囲の期待に合わせてきた受動性が認められる。また，S・Aの学生は，土川（1980）や加藤（1990）が指摘するように「妙に人とぶつかりあわない」対人傾向があり，他者から言われれば来談し，質問されれば答えるが，決して自分から問題解決を図ろうとしない受動性を一貫して示す。土川（1990）は，この点をとらえてS・Aの典型例Ⅰ型を受身回避型としている。

さらに，他者の期待を先取りし，適応的である点は，S・Aの自立性を表す。彼らは，他者から言われる前に期待を先取りして適応的に行動し，他者に依存することや他者から批判や非難をされることを極力避ける。この点では，彼らは，意識的には非常に自立性が強い。しかし，その自立的性格は，周囲の期待に合わせるという受動性に基づく自立性であり，真の意味での主体的自立性ではない。そのため，きちんとした状態が保てない困難な状況になった場合には，現実や他者を無視する自己愛的自立性となる。このような場合，笠原（1984）が指摘するように「やればできる」「何とかなる」といった自己愛的な万能感に固執し，批判的な他者を避けるようになる。土川（1990）はS・Aの典型例Ⅱ型を自己愛型とし，小川（1992）は自己愛（ナルシシズム）の観点からS・Aの人格を分析しており，これからもS・Aの自己愛的自立性が推測される。

以上に示した観点からS・Aの性格としては，TABLE3に示した強迫性，受動性，自立性を取り上げた。このようにS・Aは，受動性を基礎とした自立性という非常に不安定な性格による適応を強迫的に保とうとするため，他者からの批判には敏感にならざるを得ないといえる。上記事例研究でみられた人間的つながりのなさは，このような対人的な敏感性と密接な関連があると推測される。

研究2

Ⅰ．予備研究

1．はじめに

研究2では，研究1で示されたS・Aの分類概念モデルを基準として分類された事例を対象に下位分類の研究を行うが，それに先立ち，これまでなされている下位分

TABLE4　下位分類リスト※

Walters	広範囲無関心型（長期）	特定状況反応型（短期）
笠原	準神経症型（単一）	ボーダーライン型（複合）
石井	アパシー純型（選択回避）	うつ状態境界型（全面的に引きこもり）
島崎・竹内	無葛藤型（内閉神経症類似）	葛藤型（神経症近似）
岡庭	中核群（単一）	中核群以外（複合，進路問題）
山田	静かな型（選択回避）	騒々しい型（選択⇄全面回避，葛藤状況，複合）
加藤	準神経症型（分裂質，無葛藤）	神経症型（葛藤表現）
土川	受身回避型（単一，選択回避）	自己愛型（複合，選択⇄全面回避）

※用語は，（選択，全面）回避に統一〔＝（部分，全体）撤退＝（選択，完全）退却〕。単一は回避のみの場合，複合は他の症状を呈する場合を示す。（　）内は，その特徴を示す。

類研究を概観し，その問題点と課題を明らかにする予備研究を行う。

2．既存の下位分類の問題点

これまで，Walters（1961）をはじめ，笠原（1978, 1979），石井（1981），島崎・竹内（1981），岡庭（1983），山田（1987），加藤（1990），土川（1990）がＳ・Ａの下位分類を試みており，それらをまとめたのがTABLE4である。

TABLE4に示した論者の下位分類の基準は，大まかに分けるならば，「部分（選択）回避のみの単一型」VS「他症状を併発し，完全回避も示す複合型」の基準①，「葛藤を示さない無葛藤型」VS「葛藤を示す葛藤型」の基準②の２つに分けられる。

単一・複合基準①に相当するのは，笠原，石井，岡庭，土川である。これを病態水準との関連でみていくと，笠原は単一型を準神経症とし，複合型を神経症と精神病の中間とする。石井は，複合型をうつ状態との境界とする。岡庭は，複合型では抑うつや不安などの精神症状が主景となると述べているので，神経症レベルといえる。土川は，単一，複合どちらも人格障害とするが，複合型は境界性人格障害と重なるとする。

以上の単一・複合基準による下位分類では，いずれの論者も単一型をＳ・Ａの中核群とし，複合型を重症群とするが，その場合複合型でみられる症状をどのように理解するかが問題となる。というのは，その症状はあくまでもＳ・Ａの構造の内から生じる（その場合，複合型はＳ・Ａの一類型）とするのか，あるいは他の障害の影響を受けて生じる（その場合，複合型は他の障害との複合体）とするのかで，Ｓ・Ａの病態レベルや臨床単位の見方が大きく変化するからである。ところが，いずれの論者もその点の議論を明確にしていない。しかも，Ｓ・Ａの概念自体が曖昧であるのに，他の障害との複合型や境界型を安易に付け加えるならば，他の障害との判別の基準を益々曖昧にし，臨床単位としての可能性も否定することになりかねないが，そのことにも注意が払われていない。

無葛藤・葛藤基準②に相当するのは，島崎・竹内，加藤，Walters，山田である。島崎・竹内，加藤は，無葛藤型を中核として，葛藤型を神経症に近いとする。Waltersは「漠然とした無関心を示す」型と「特殊な状況への恐怖に基づく」型とに分けているので，ほぼ無葛藤・葛藤の分類に当てはまる。この無葛藤・葛藤の分類の問題点は，葛藤を安易にＳ・Ａ概念に含ませたことである。それは，本来葛藤が見られないことが特徴であったＳ・Ａの概念自体を内部から混乱させることになる。実際，葛藤型は，筆者の分類概念モデルではＳ・Ａには含まれない可能性が高い。

島崎・竹内，加藤，Waltersの下位分類における葛藤概念が内的葛藤を意味していたのに対して，山田の騒々しい型における葛藤状況は，外部環境で生じるトラブル，つまり外的葛藤との意味で使われている。この騒々しい型は，恐怖症状，ヒステリー症状を初めとするさまざまな症状を併発するので上記複合型とも重なり，重症タイプとなる。しかし，この場合も，葛藤状況（外的葛藤）を示す事例を下位分類に含めたことで，葛藤場面の回避を特徴とするＳ・Ａ概念を内部から混乱させることになる。山田は，この型をサブクリニカルな問題性格群と幅広くとらえており，そもそも山田自身はＳ・Ａを臨床単位とみなすことに消極的である。実際，山田の騒々しい型は，筆者の分類概念モデルではＳ・Ａとはならず，むしろ転換性障害，恐怖性障害（特に社会恐怖），演技性人格障害と考えられる事例が含まれる。

以上みたように既存の下位分類は，いずれもＳ・Ａの分類概念を明確にしないまま，他の障害との複合型や境界型を設けたり，本来ならばＳ・Ａには異質な葛藤を含

んだ型を設けたりすることで，自らＳ・Ａの分類概念を曖昧にする結果となっていた。これは，Ｓ・Ａの概念研究と下位分類研究を並行して行っていることに原因がある。

そこで，下位分類の研究は，まず最初に明確な分類概念を示した上で，あくまでもその分類基準の枠内で下位分類の検討を行うことが必要となる。その場合，もし下位分類が見いだされたならば，それは分類概念内の差異となるので，その下位分類は，分類概念の下位構造との関連で説明されなければならない。つまり，概念研究と下位分類研究を並行して行っている既存の下位分類研究では，基準が症状や葛藤の有無という外面的な差異とならざるを得なかったのに対して，まず分類概念を措定した後に行う下位分類研究では，当然見いだされる差異は措定された概念の構造の内部の差異となり，その下位分類基準は概念の内部の下位構造との関連で説明されなければならない。したがって，その下位分類の差異が，そこで仮定されている概念モデルの構造の差異から説明できるならば，概念と下位分類との一貫性が認められ，概念モデルの妥当性が示唆されることになる。

３．下位分類の研究法の問題点

前項では既存の下位分類の内容を中心に検討したが，以下においては臨床的な実証研究法，つまり研究の方法の検討を行う。

臨床的な実証研究の観点に立つならば，既存の下位分類研究は，提示されるケースが少ないうえに比較検討のための基準の提示とそれに基づく具体的データの記述がないことが問題である。岡庭（1983），加藤（1990）以外の研究では，いずれも各論者の臨床的経験や直感による下位分類の提示と，それを裏付ける数例の事例の記載がなされているだけであるので，恣意的な印象は否めない。岡庭，加藤の研究についても16例，15例の簡単な特徴が示されているだけで，援助経過や下位分類の構造についての考察はなされておらず，しかもその約半数は，複合型や葛藤型など厳密に言えばＳ・Ａの分類外とされる可能性の高い事例となっている。

また，研究１で示したようにＳ・Ａは，自発来談が稀で，しかも来談しても自己を語ることはなく，容易に中断してしまう。このような特徴から，Ｓ・Ａに関するデータは非常に得られにくく，しかもデータそのものが研究者（援助者）の対応によって変化する非常に不安定なものとならざるをえないが，いずれの研究でもそのことを問題としていない。例えば，研究１の事例研究で示した「つなぎ」モデルによる援助では，基本的にアパシー者を追い込むことはなく，関係を維持することを重視するので，通常の医療的対応や心理療法的対応と比較して障害や症状の出方が異なる可能性が高い。

したがって，Ｓ・Ａのデータの分析においては，データ収集の場の援助者（研究者）の関わり方を一定とし，その特徴を明らかにしたうえで，その特徴との関連で経過を検討して初めて，得られるデータを下位分類の参考データとできる。この点が，対象（クライエント）との関係性を前提として研究を行う実践型研究の最低限の条件であろう。

さらに，臨床研究における関係性に関していうならば，経過中に対象と関わっている際の，対象に関する研究者の印象，あるいは対象と関わることで生じてくる研究者の感情も判断のための重要なデータとなる。特にＳ・Ａのように言語による自己表現が少なく，原始的な防衛機制としての行動化が多い事例では，いわゆる研究者の逆転移が対象の関係性の在り方を理解するうえで必須のデータとなる。Ｓ・Ａと関係する援助者（研究者）の逆転移に関しては，Walters（1961）は「怒りとやりきれなさという強い逆転移感情を引き起こすことは疑いない」と述べており，上記事例研究でも示したように，逆転移を理解できなければ，援助者（研究者）はＳ・Ａの障害を理解できないし，関係も維持できないことになる。しかも，援助者（研究者）の逆転移感情は，関わりの対象であるアパシー者の障害の在り方によって微妙に変化するものであるので，援助者（研究者）に生じる逆転移感情の在り方がＳ・Ａの障害の下位分類を行う際の重要な手掛かりとなると推測される。このようにＳ・Ａの臨床援助では，研究者（援助者）の逆転移感情が対象理解の重要な要因になっているのにもかかわらず，既存の下位分類研究では全く考慮されていない。

なお，Ｓ・Ａの言語表現が少ないことから，それを補う資料として心理テストのデータが有効である。研究１の事例研究でも，対象の心理障害や性格の問題を推測する上で絵物語法のデータがたいへん参考となっていた。上記下位分類研究で心理テストのデータを参考としているのは島崎・竹内のロ・テストを用いた３事例のみである。

４．下位分類研究の課題

以上みたようにこれまでの下位分類研究にはいくつかの問題点があることが明らかとなった。本研究では，これらの問題点の改善を目指して研究計画を構成することとした。

まず，概念研究と下位分類研究を並行して行っていた

問題であるが，この点に関しては本論文では研究1において既に3次元からなる分類概念モデルの提示を行っている。そこで，本研究においては，まず3次元からなる概念モデルの分類基準を満たすもの，つまり3次元で示された障害の内容を全て示す典型例のみを下位分類の対象とすることとした。また，分類概念内で下位分類の差異を説明する問題については，次のように考えられる。研究対象を3次元の概念モデルを満たすとの限定を行った場合，行動障害の次元で否認と分裂という原始的防衛機制が前提条件となるので，下位分類の対象となるS・Aの病態レベルは人格障害となる。人格障害としてのS・Aの人格構造については，下山（採択済み）が仮説モデルを提案しているので，下位分類における差異は，その仮定された人格構造モデルの下位構造との関連で検討を行うこととなる。

次に，臨床的な実証研究の方法論の問題であるが，本研究では，対象と研究者との関係性を排除した自然科学的な客観性を目指すのではなく，その関係性を前提とする実践型研究を行うこととする。したがって，対象と研究者との間で生じる関係性の質やその経過が重要なデータとして利用される。その場合，研究者（援助者）の関わりの在り方が問題となるが，研究1で示したように筆者は，S・Aの援助に関してはある時期以後，「つなぎ」モデルによる援助的介入を一定して行っている。したがって，本研究では，「つなぎ」モデルのスタンスが研究者（援助者）の係わり様式として一定しているので，その関係において生じた研究者の側の印象や逆転移感情，あるいは関わりの経過（援助経過）が，関係性の質や対象の障害を分析する研究データとして利用できることとなる。

さらに，心理テストのデータ利用の問題に関しては，筆者の場合には，「つなぎ」モデルの一環としてロ・テストを実施しているので，対象となる全てのS・Aのロ・テストのデータを利用できる。

ロ・テストのデータは，臨床的な実証研究の観点から以下のような利点がある。研究者（援助者）の印象や逆転移感情には研究者の先入見や両者の相性などが入りこむ可能性が高い。それに対して，ロ・テストのデータは，信頼性が高く，分析方法も一定し，標準値も公表されているので，関係性データの相対性を補完する役割を担うことができる。また，研究者の印象や逆転移感情は，関係に表れる防衛的な特徴からS・Aの障害や性格傾向を推測する。つまりS・Aを外側からの検討のためのデータである。それに対してロ・テストの反応は，対象者の認知構造を分析し，それを基に障害の構造を推定する，つまり内側からS・Aを検討するためのデータとなる。したがって，両者のデータとその分析結果を比較することでS・Aの障害の構造を外と内の両面から多面的検討することが可能となる。

5．人格構造モデル

上述したように本研究では，これまでの下位分類研究の問題点を踏まえ，概念モデルで仮定される人格構造モデルとの関連で下位分類を検討することとなった。そこで，以下において，下山（1995）が仮説モデルとして構成した人格構造モデルを確認し，次章の下位分類研究の準備を行う。

下山は，研究1で示した3次元の概念モデルと「つなぎ」モデルに基づく事例研究を行い，境界例人格構造との比較を中心とした考察から以下に示すS・Aの人格構造モデルを提案している。そのモデルでは，人格の基底には知性と情動の分裂があり，人格の意識部分には知性のみが関与し，情動や情動エネルギーは人格から分裂排除される構造が想定されている。情動が排除されることによってアンヘドニアに代表される活力の乏しい心理障害が生じることとなる。また，情動と分離された知性は，周囲の期待に合わせて適応的な自己を保つための機能を発展させる。その結果，表面的な人格としては，周囲の期待に受動的に合わせて自立的に振舞うS・Aの適応強迫性格が形成されている。さらに，基底では情動が排除され，表面では他者の期待に合わせるという人格構造は，研究1で示した強迫的性格のために融通性のない硬い構造となっている。その結果，困難な状況に陥った場合には，自己の情動的なエネルギーや欲求に基づく主体的な行動をとることができず，否認や分裂といった原始的防衛機制に基づく，行動化を強迫的に繰り返し，現実を回避する。それが，S・Aの行動障害となる。

このように仮定される人格構造モデルは，S・Aの3次元概念モデルと対応しており，この人格構造モデルとの関連で下位分類が説明されるならば，人格構造モデルの妥当性が示唆されたとみなすことができる。なお，人格構造モデルを精神病理学やパーソナリティ論の用語では，次のように解説できる。

知性と情動が分裂し，人格から情動が分裂排除されている基本構造は，シゾイド人格に相当する。この点に関して，Walters（1961）や笠原（1978, 1979）は，S・Aはシゾイドのように人間への深い不信感や冷たさがないとしてS・Aとシゾイドの鑑別は可能とする。確かに，S・Aは土川（1981）がニソニソ仮面と呼ぶように独特の愛想のよさを示すので，DSMIVの分裂病質人格障害

(Schizoid Personality Disorder) で示されるようなシゾイドの典型例とは異なる側面はある。しかし，研究1の事例研究でもみられたように表面の協調的な態度とは裏腹に，援助過程が進むにつれて対人的信頼感の希薄さが明らかになる。また，絵物語法では，その人間への不信感や冷たさが象徴的に示されていた。したがって，S・Aの人格は，基底にはシゾイドがあり，表面では適応的態度を示す2重構造となっており，シゾイドが上部の適応強迫性格によって隠されている人格構造といえる。

シゾイドとS・Aの障害との関連については，例えば，アンヘドニアに早い時期に注目したGlauber (1949) は，アンヘドニアとシゾイドの関連性を指摘しており，近年の人格障害研究をまとめているKantor (1992) も，分裂病質人格障害の特徴としてアンヘドニアと回避行動をあげている。これらの研究はシゾイドとS・Aの心理障害，行動障害との共通性を示しており，この点からもS・Aの人格構造の基底にシゾイドが潜んでいることが伺われる。このようにS・Aの人格は，典型的シゾイドではなく，基底にシゾイドを含んだ独特な人格構造である。これを，対象関係論の用語でみていくと以下のように記述できる。

Guntrip (1968) は，こどもが母親に対して愛を求めても得られない状況で，他者に対して愛を求めること自体を諦めてしまう段階と母親に対して憎しみ（攻撃性）を感じる段階とがあり，前者がシゾイド（分裂的）反応，後者が抑うつ反応となるとする。抑うつでは愛情や対象に関する欲求がみられるのに対して，シゾイドでは愛情や対象に対しては拒絶的であり，それが引きこもりとなる。また，抑うつでは，怒りや罪悪感といった感情がみられるが，シゾイドでは「どんな感情ももたず，距離をおいて，まきこまれず，観察する」態度となり，「感情の分裂的抑圧や情緒的関係からの分裂的退却」が進むことになる。これは，まさにS・Aの示す心理・行動障害と重なる。

ところで，牛島 (1983) はシゾイドと境界例の障害との関連を論じているが，S・Aでは境界例のような不安定な感情や愛情対象を求めての行動化はみられない。これは，S・Aでは，Kleinの理論における妄想－分裂態勢 (Paranoid-Schizoid position) を起源とするgoodとbadの対象分裂 (splitting) や投影同一視といった対象関係の障害がみられないことを意味する。S・Aでは，goodとbadの分裂ではなく，適応強迫性格で示されるように，常に他者に対してgoodな自己であろうとする。そのため，困難な状況では他者に対してその場限りの対応をし，否認や分裂といった原始的防衛機制を使用してgoodな自己を維持しようとするが，その場限りであるため，結果的には自己の一貫性がなくなり，自己の分裂が明らかとなる。このようにS・Aの分裂はgoodとbadの分裂でなく，あくまでもgoodな自己の分裂であり，問題はそこからbadな側面が排除されていることである。このように他者にとってのgoodな自己という点でS・Aの自己は，Winnicott (1965) の「偽りの自己 (False Self)」に相当する。境界例の障害では，不安定ではあるが，情動表出や対象希求性を通して「本当の自己 (True Self)」が示されるのに対して，S・Aでは，徹底してそのような情動や欲求が排除されている。これは，S・Aの心理障害の自己不確実に通じる側面である。

以上みたように，基底にある知性と情動の分裂が上部の適応強迫的性格によって隠されているというS・Aの人格構造モデルは，対象関係論的パーソナリティ論では，「シゾイド」を基本的構造とし，その上に「偽りの自己」が形成されている人格構造と表現できる。このようなS・A独特の人格を馬場 (1983) に倣って図示するとFigure 1のようになる。

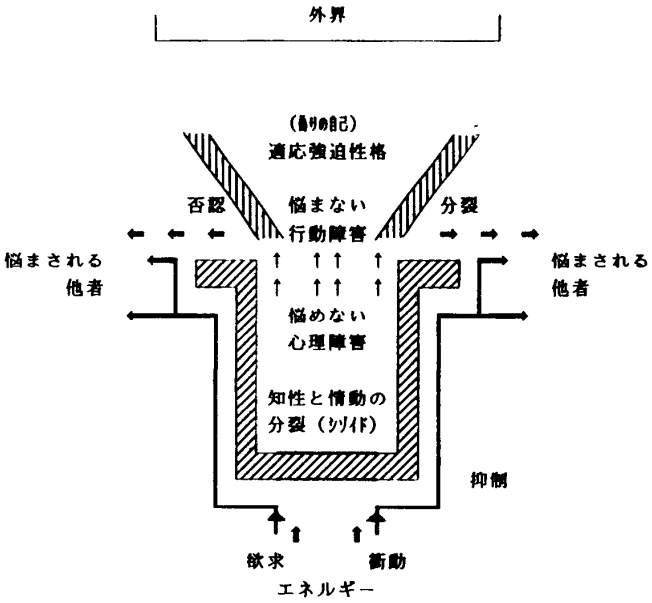


FIGURE1　S・Aの人格構造モデルの図式化

＊小此木 (1984) は，分裂（シゾイド）性格の特徴として①人との関わりを避ける引きこもり傾向②知性優位で感情が希薄。生き生きした実感，現実感の欠如③その場その場で偽りの自己を演じ，人格の一貫性に欠けるの3点を挙げている。この分裂（シゾイド）性格との関連でS・Aの人格構造をみてみると，平常時では③の偽りの自己が上部構造として前面に表れているが，困難時には①が前面にでて，回避行動を繰り返すと理解できる。

このように状況に応じて人格特徴が移行する点で，S・Aの人格構造は典型的なシゾイド性格ではなく，基底にシゾイドがあり，上部に偽りの自己があるという独特の2重構造になっていることが示される。

II．下位分類研究

1．はじめに

自験例を対象としたS・Aの下位分類の臨床的実証研究を行う。その際，予備研究で示したように既定の分類概念モデル内での下位分類の検討を行うので，概念モデルで仮定されている人格構造モデルとの関連で下位分類の差異の説明を試みる。仮定されている人格構造モデルが下位分類の差異を適切に説明できるならば，人格構造モデルの臨床的な妥当性が示唆されることになる。したがって，本研究の目的は，下位分類の研究と併せて人格構造モデルの妥当性の検討を行うことである。

2．事例の選択と要約

(1)　事例選択の基準

次の条件を全て満たす事例を研究対象として採用する。

① 筆者が，担当した事例で，詳細な記録が残っているもの。
② 研究1で示した3次元の分類概念に適合していること。
③ 本人面接が中心に行われた事例であること。
④ 「つなぎ」モデルによる援助を試みていること。
⑤ ロ・テストを施行していること。
⑥ 援助開始後8カ月以上の経過を把握できていること。

以上の条件を満たす20例を採用し，年齢の高い順にTABLE5に示した（TABLE 5は，大部なので論文の末尾に付した)。20番目の事例は，大学職員であったが，年齢が23歳で，しかも状態が上記条件に合致していたのでS・Aとし，年齢とは関係なく20番目に加えた。事例は全て自験例であるので，所属する大学は，筆者が以前に学生相談担当の常勤の臨床心理士として勤務していたX大学（総合大学）とY大学（理工系大学）である。

採択された20例以外に，家族援助を中心に行った事例，短期間で終了又は中断となった事例，ロ・テストを施行する機会のなかった事例，判別が確定しなかった事例などS・A関連の事例は数多くあったが，厳密に条件を満たすことを重視し，対象を絞りこんだ。

(2)　事例情報の要約の基準

選択された事例の情報を以下の基準で要約し，TABLE5に記述した。

事例番号（来談時の年齢，学年，大学・学部）：留年は所属する大学・学部の進学の内規により異なるうえに，留年者への指導も大学・学部の単位未取得者チェックシステムによって異なるので，来談時の学年は回避の程度や期間とは必ずしも比例しない。

I．学業回避状態であった期間（来談時まで）／学業回避の契機：学業の回避状態であった時期については，入学後の年数の上に網かけ（1　2）をして示した。

II．来談経路／回避期間における活動：来談勧告を→で示した。下線のある者が来談者である。表中の「教」は教官，「事」は事務官，「本」は本人の略である。回避期間における活動には，全面回避し，自室に閉じこもって行っていた行動も含めてある。

III．来談時の印象：来談初期の印象であり，後の援助経過によって変化した場合もある。

IV．家族状況：父親／母親／同胞／児童期の特徴／親子関係：家族状況は，人格形成と関連がある。親子関係は，従順，配慮，黙従，服従，反抗の5種類に分類した。「従順」は，親に依存し，素直に従っているタイプ。「配慮」は，親を思いやり，気を使って親に合わせているタイプ。「黙従」は，不満があるが，親に合わせているタイプ。「服従」は，親に反発はあるが，反抗できずに従わされているタイプ。「反抗」は，親への不満を表現し，親との対立が生じているタイプ。

V．援助経過：援助経過は，「つなぎ」モデルによる援助開始後にみられた行動障害，心理障害を中心に経過を略記する。

VI．援助者側に生じてきた感情：援助者側に生じてきた感情は，援助関係における援助者の逆転移感情である。

VII．媒介関係者／大学生活の結末／相談の結末／その後：媒介関係者とは，「つなぎ」モデルによる援助の過程で媒介者として援助の協力を得た関係者である。相談の結末としては，初期中断，中断，終了，引継ぎがある。

以上の基準で各事例の概要をTABLE 5にまとめたが，TABLE5は各事例ごとの記載としては簡略であるが，20事例全体の特徴を概観，比較するためには情報量が多すぎる。そこで，主に下位分類を行う際に必要となる情報をピックアップし，全体比較が可能なレベルにさらに簡略化してTABLE6に記載した。なお，TABLE6における行動障害，心理障害の欄の記号は以下の状態を表す。行動障害については，相談開始前及び援助過程を通して精神症状がみられなかった場合には□，困難時に一時精神症状を呈したが，困難が回避されると症状が消失する

TABLE6　事例情報の要約から抽出された特徴（※数字は年単位）

	来談まで				概念モデル					援助過程				
事例番号	年齢	在籍期間	回避期間	来談経路	行動障害	心理障害	性格傾向	症状	活動	期間	結末	学籍	親子関係	特　徴
①	27	9	4	教→本	□	□	受動		卓球	2半	引継	休学	配慮	優しすぎる
②	26	8	8	本	▽	□	受動	試験恐怖	塾講師	2	中断	退学	黙従	オドオド
③	25	6	2	教→母／本	□	□	自立		パソコン	3	終結	退学	黙従	行動的
④	25	6	4	教→本	□	▽	受動		読書	1	終結	卒業	配慮	冷静
⑤	25	5	2	教→本	□	▽	自立		読書	1	中断	留年	従順	知性化
⑥	24	6	6	親→本	▽	□	強迫	不安症状	パチンコ	5	引継	退学	服従	対人緊張
⑦	24	6	3	教→本	▽	▽	強迫	強迫症状	サークル	4	終結	退学	黙従	完全癖
⑧	24	5	4	（教→）本	▽	□	受動	心気症状	ファミコン	半	初期中断	休学	黙従	オドオド
⑨	24	4	2	教→教＋本	□	▽	自立		ファミコン	1	中断	退学	配慮	知的万能感
⑩	24	5	3	教→母＋本	□	▽	受動		家庭教師	1	終結	卒業	配慮	繊細
⑪	23	5	2	教→教＋本	□	▽	受動		パソコン	2	引継	休学	配慮	オドオド
⑫	23	4	2	教→本	□	▽	受動		ビデオ	1	引継	留年	黙従	生活感なし
⑬	23	4	1	教→父＋本	□	▽	受動		ドライブ	1	中断	退学	従順	依存性
⑭	22	4	2	教→親→本	□	▽	自立		パチンコ	2半	終結	退学	黙従	調子のよさ
⑮	22	4	3	教→本	□	▽	自立		アルバイト	1	中断	転学	黙従	自己中心性
⑯	21	2	1	教→本	▽	▽	自立	対人恐怖	ファミコン	1半	引継	休学	服従	淡々
⑰	21	3	1	教→本	▽	▽	受動	関係念慮	ファミコン	1半	中断	退学	配慮	意欲低下
⑱	20	2	1	教→母＋本	▽	▽	自立	抑うつ	バイク	半	初期中断	退学	配慮	生気のなさ
⑲	19	1	1	教→本	□	□	受動		サークル	3	引継	留年	従順	未熟性
⑳	23	1	1	事→事＋本	▽	▽	自立	身体症状	読書	1	終結	退職	従順	自己愛性

という分裂的行動を示した場合には▽とした。心理障害については，面接過程において（多くの場合後半で），心理障害を自己の問題として意識し，話題にできた場合を□，面接場面で自己の問題として言及できなかった場合を▽とした。ただし，心理障害を自己の問題と意識したからといって，それが心理的葛藤状態に移行することはなく，改善がみられることはほとんどなかった。

3．下位分類の作成と検討

(1)　「印象」による分類

S・Aは，深刻な事態を否認しているため，特に初期の面接では他人事のような応えが多く，拍子抜けするほど楽観的でさえある。表面的には土川（1981）がニソニソ仮面を称した独特の愛想のよさを示し，内面的な気持ちの動きがストレートに表現されることはない。本研究のいずれの事例でも，程度の差こそあれ，この独特の愛想のよさが見られた。しかし，表面的な愛想のよさを通して援助者の側に伝わってくる微妙な気持ちの動きの違いにより，援助初期の「印象」は大別して2つのタイプに分かれる。

まず，第一のタイプは，微かではあるが気持ちの動きが援助者に伝わってくる「素朴型」タイプである。このタイプでは，どこかすまなそうな困惑した，或いは怯えた姿が愛想のよさの下に仄見え，ある種の素朴さが感じられる。ただし，その気持ちの動きは葛藤となることはなく，その困惑や怯えが悩みとして表現されることはない。TABLE 5，6で「素朴型」に当てはまるのは，①②⑥⑧⑪⑫⑬⑲である。

第2のタイプは，表面の愛想のよさとは裏腹に，気持ちの動きが援助者に伝わってこない「警戒型」タイプである。話しぶりは理知的で，隙を見せないといった警戒的な雰囲気があり，会っていてこの人と情緒的交流をするのは難しいと感じられるタイプである。TABLE 5，6で「警戒型」に当てはまるのは③④⑤⑦⑧⑨⑩⑭⑮⑯⑰⑱⑳である。

「印象」による下位分類については，以上のような結果がみられた。そこで，以下において，得られた下位分類の結果との関連で，人格構造モデルの妥当性の検討を行う。

「印象」は，S・Aの表面的な特徴に基づく下位分類

である。したがって，下位分類は，理論的には人格構造モデルの上部構造である適応強迫性格（「偽り自己」）との関連が推論される。そこで，モデルの妥当性を示すためには，上部構造の差異が下位分類の差異を説明できなければならない。

上部構造である適応強迫性格は，研究1で示したように概念モデルでは強迫性，自立性，受動性で構成されており，「他者の期待を受動的に先取りし，自立的な適応をめざす」との特徴があった。したがって，適応強迫性格は，受動性を主とする適応強迫性格と，自立性を主とする適応強迫性格とに分けられ，この差異が「素朴型」と「警戒型」の2種類の下位分類の差異となるとの説明が可能である。実際，「素朴型」では，自己表現は少ないものの，援助者の意図に対する受動的素直さが感じられた。それに対して「警戒型」では，表面では協調的であったが，援助者に心理的には依存しないとの自立的な構えが感じ取れ，受動性と自立性が両分類の差異と関連していることが推測された。このように人格構造モデルにおける差異が「印象」による下位分類の差異を説明することが可能となっているので，モデルの妥当性が示唆されたといえる。

なお，TABLE5,6に示されているように親子関係は，従順4，配慮7，黙従7，服従2，反抗0となっていた。この数字が示すように親に実際に反発した経験のある者はなく，親の期待に合わせて児童期，青年期を送ってきた者ばかりである。この点からも，S・Aの適応強迫性格（偽りの自己）が推測される。また，身体障害，単身赴任，多忙等で父親との接点が乏しい者がほとんどである。父親の存在の希薄さと，その反動としての母親からの期待の重さといった環境が，他者の期待に合わせる偽りの自己を中核とする適応強迫性格の形成と関連していると推測される。

(2)　「援助者の感情」による分類

「印象」は援助開始時の援助者の反応であったが，「援助者の感情」（以下「感情」）は，援助の経過が進むにつれて生じてくる援助者の反応である。アパシー者は，上述した独特の愛想のよさをもち，面接場面では援助者に同調的でさえある。しかし，自発的に自己を語ることや行動の改善を試みることはなく，遅刻や中断が繰り返される。呼び出すとヌケヌケとやってくるが，また突然来なくなる。しかも，来なくなるのは，試験や書類の提出といった何か重要な現実的課題が差し迫っている場合が多い。そのような時に援助者の側にどのような感情が生じるかは，対象者であるS・Aの学生と援助者との間でそれまでに形成されていた関係の在り方と密接な関連性がある。つまり，この「感情」は，精神分析における分析者の逆転移に相当する現象である。したがって，「感情」から対象となっているアパシー者の関係性の特徴が推測できる。

「感情」は，TABLE5の「援助者側に生じた感情」の内容の検討から3つのタイプに分けられた。第1のタイプは，来談しなくても「彼も困っているだろう。また，こちらから電話すればいい。しようがないな。困った奴だ」と感じられ，援助者としても困惑させられるが，苛々は起こらない「困惑感」タイプである。このタイプでは，行動化が見られても援助者の側である程度余裕を持って関われる関係性が生じている。TABLE 5，6でこれに相当するのは，①②④⑥⑩⑪⑫⑬⑯⑲である。

第2のタイプは，「自分勝手で調子がいい学生だ。人を困らせるのもいい加減にしろ。勝手にしろ」といった苛立ちの感情，時には援助者の側で自分が利用されているだけであるという被害感に近い感情が湧いてきて，ひどく苛々させられる「苛立感」タイプである。当事者の行動化によって，援助者側で容易に余裕を失ってしまう不安定な関係性がみられる。行動化を予想していても，回避により援助者の攻撃性が刺激され，援助者自身の感情コントロールが危うくなることを考えるならば，このタイプは他者を情緒的に混乱させる要素を多分に含んでいる。TABLE5,6でこれに相当するのは，③⑤⑨⑭⑮⑳である。

第3のタイプは，「やはり来なくなったか。つながりをもてそうもない。気が重い。面接することが役に立つのか。難しい」と感じられ，援助者に無力感が生じてくる「無力感」タイプである。このタイプでは，援助者の側で余裕をなくしたり，情緒的に混乱することがない代わりに，ある種の絶望感を感じてしまう。この場合，他者との間で関係性を構成すること自体の障害が推測される。TABLE5,6でこれに相当するのは，⑦⑧⑰⑱である。

「感情」による下位分類については，以上のような結果がみられた。そこで，以下において，得られた下位分類の結果と関連で，人格構造モデルの妥当性の検討を行う。

「印象」が初期段階における当事者の表面的特徴の評価であるのに対して，「感情」は，面接が進んだ段階で当事者と援助者の間に成立した関係性の評価であり，当事者の人格の全体構造に深く関与している。したがって，「感情」による下位分類は，理論的には人格の基底構造を含んだ人格の全体構造と関連があることが推論される。そこで，モデルの妥当性を示すためには，基底構造である知性と情動の分裂（「シゾイド」）と上部構造である適

応強迫性格の両者の組合せによって構成されている全体構造の差異が下位分類の差異を説明できなければならない。

適応強迫性格が知性と情動の分裂を程よく隠し（防衛し），全体としては協調的で他者にシゾイド性が伝わりにくい人格構造である場合は，「困惑感」となる。この場合は，適応強迫的性格がシゾイドの防衛となっており，シゾイド性が表面に出ることがない。それに対して，自立性の強い適応強迫性格のため，性格が知性と情動の分裂を補強する自己愛的防衛として形成され，困難時にシゾイド性が自己愛的な形をとって示される場合が，「苛立感」となる。この場合は，シゾイドが自己愛性によって強化され，自己中心的表現となるため，他者の攻撃性を刺激することになる。また，適応強迫性格が知性と分裂の防衛としての役割をなさず，困難時にはシゾイド性が症状として直に表れる場合が，「無力感」となる。この場合は，適応強迫性格が未熟で防衛機能を果たせないため，シゾイド性がそのまま表現されることになる。

このように基底構造と上部構造の組合せの差異によって「感情」による下位分類の差異を説明することが可能であるので，人格構造モデルの妥当性が示唆されたといえる。

(3)　「印象」と「感情」の関連性

「印象」と「感情」のクロス集計をTABLE7に示した。「素朴型」は，1例を除いて全てが「困惑感」となっている。例外の事例⑧は，表1にも示したようにオドオドした感じが伝わってくる点では素朴であるが，そのオドオドした感じは恐怖感に近いものであり，しかも一時的に心気症的訴えもみられたことから関係を結ぶこと自体が困難に感じられ，援助者の感情としては「無力感」となった。

TABLE7　「印象」と「感情」の関連性

感情＼印象	素朴型	警戒型
困惑感	①②⑥⑪⑫⑬⑲	④⑩⑯
苛立感		③⑤⑨⑭⑮⑳
無力感	⑧	⑦⑰⑱

それに対して「警戒型」は，「感情」の3タイプに分散している。半分の6事例は，「苛立感」となっている。これは，「警戒型」では援助者に気持ちの動きが伝わってこないだけに，回避がみられると援助者側に不信感が強くなり，イライラしやすくなるとの推測が可能である。「印象」が「警戒型」で「感情」が「困惑感」であった3事例（④⑩⑯）は，いずれも面接の回避（中断）が比較的少なく，定期的に通ってきた事例であり，定期的面接によって援助者との間に信頼感が形成されていた。「警戒型」で「無力感」となった3事例（⑦⑰⑱）は，それぞれ一時的に強迫症状，被害念慮，抑うつ症状が見られ，障害が重く，関係の形成が困難と感じられた事例であった。

以上みたように「素朴型」に比して「警戒型」では，関係が深まり，人格の基底構造が関与する「感情」ではさまざまタイプに分かれた。これは，人格構造モデルとの関連では次のように説明できる。受動性の強い「素朴型」では，基底構造のシゾイドに対しても受動的で，無理な防衛はしていないので，基底部分が関与する「感情」となってもそのまま「困惑」に移行していくことになる。それに対して自立性の強い「警戒型」では，基底構造に対しても過剰な防衛をしており，人格の上部構造と基底構造との組み合わせが一定ではないので，「感情」によって基底構造が関与してくるとさまざまな状態が生じることになる。

なお，以上の結果は，印象が「警戒型」であった場合には，表面の印象だけから人格の全体が予測できないことを示唆している。

(4)　援助経過との関連性による検討

援助経過は，4タイプに分けられる。第1のタイプは，援助者との間で人間的つながりができる以前の比較的早い時期の中断（初期中断）で，⑧⑱がそれに相当する。第2のタイプは，一定期間継続した後に中途半端な形で関係が切れてしまった場合（中断）で，これに相当するのは②④⑩⑬⑮⑰である。第3のタイプは，一定期間継続し，後任に引き継いだ場合（引継）で，後任に引き継げるほどに人間的つながりが形成されていたとみることもできる。これに相当するのは，①⑪⑫⑯⑲である。第4のタイプは，それなりの成果が出て，お互いが納得して終結となった場合（終結）で，これに相当するのは③⑤⑥⑦⑨⑭⑳である。

なお，継続と終結に関しては，援助が開始された時期に左右されるので両者の区別は非常に相対的である。また，終結事例は，20事例中7事例，引継を含めても13事

TABLE8　「印象」と「援助経過」との関連性

経過＼印象	素朴型	警戒型
初期中断	⑧	⑱
中断	②⑬	⑤⑨⑮⑰
引継	①⑪⑫⑲⑥	⑯
終結		③④⑦⑩⑭⑳

例である。しかも，終結といっても心理障害が改善された事例はなく，いわゆる治癒とは異なる終結である。改めて援助の難しい障害であることを痛感する。

上記援助経過と「印象」,「感情」の下位分類の関連性をTABLE8,9に示した。「印象」と援助経過との関連では,「素朴型」では引継が多く，終結事例がない。したがって，印象が素朴であっても，必ずしも改善が早いというわけではないことが示唆された。「警戒型」では中断と終結が多くなっている。したがって，面接当初は警戒的であった場合，中断となることもあるが，一旦人間的つながりが形成され，継続されたならば結果としては援助の成果がみられる可能性も高いことが示唆された。

以上の結果は，人格の構造モデルとの関連では,「印象」が示す表層構造は援助の経過に直接影響を与えるものではなく，むしろ上部構造の内側にある基底構造のシゾイド性にどのように介入できるかが援助の成果に影響を与えることを示しているとみることができる。

TABLE9　「感情」と「援助経過」との関連性

経過＼感情	困惑感	苛立感	無力感
初期中断			⑧⑱
中断	②⑬	⑤⑨⑮	⑰
引継	①⑥⑪⑫⑯⑲		
終結	④⑩	③⑭⑳	⑦

「感情」と援助経過との関連では,「困惑感」では比較的引継が多く,「無力感」では比較的（初期）中断が多いとの傾向が見られた。(「無力感」の事例⑦は，父親の献身的なサポートがあったため，結果としては終結となっている。しかし，実際は，当事者の回避傾向が非常に強く，短期中断が繰り返されており，父親の協力がなければ，中断となった事例である。)「苛立感」では，中断と終結が半々であり，援助者側の否定的な感情が必ずしも中断にのみ結びつくわけでないことが示唆された。これは,「つなぎ」モデルによる援助がＳ・Ａの行動障害を前提としているため，否認や分裂によって否定的な感情を起こされても，援助者がそれに巻き込まれることが少ないことが影響していると考えられる。

以上の結果は，人格構造モデルとの関連では以下のように考えられる。「無力感」ではシゾイドが直に出ているために援助が難しく,「苛立感」では自己愛的な上部構造（防衛）を処理し，基底にあるシゾイド性に介入できるかが援助経過を左右する。それに対して「困惑感」では，受動的性格とシゾイドが緊密に結びついて性格防衛となっているため，関係が形成し易いのに反してシゾイドへの介入が難しく，終結に至りにくくなっている。

(5)　「行動障害」「心理障害」との関連性による検討

TABLE6で示したように行動障害，心理障害は，それぞれ２タイプに分かれる。TABLE10,11に「印象」「感情」それぞれとのクロス表を示し，下位分類と障害との関連性の検討を行う。

TABLE10　「印象」と行動障害，心理障害との関連性

	素朴型	警戒型
行動□	①⑪⑫⑬⑲	③⑤⑨⑩⑭⑮
行動▽	②⑥⑧	④⑦⑯⑰⑱⑳
心理□	①②⑥⑲	③
心理▽	⑧⑪⑫⑬	④⑤⑦⑨⑩⑭⑮⑯⑰⑱⑳

「印象」では，次のような結果がみられた。行動障害に関しては「素朴型」「警戒型」に特に差異は認められないのに対して，心理障害に関しては両タイプ間で異なる傾向が見られた。「素朴型」では自己の心理障害を意識できるようになる場合が半数見られたのに対して,「警戒型」では心理障害を意識し，それを話題にすることもできない状態にとどまる事例がほとんどであった。「警戒型」で心理障害を意識するようになった唯一の事例③も，援助過程の中期までは意識できない状態が長く続いており,「警戒型」では心理障害を意識が非常に難しいことがうかがえる。

以上の結果は,「素朴型」に比して「警戒型」では，上部構造が基底のシゾイドを過剰に防衛する形で構成されているため，シゾイドの障害である心理障害を意識できなくなっているとの，人格構造モデルに基づく説明が可能である。これは，上記の「印象」と「感情」との関連性で示唆された「素朴型」「警戒型」の特徴とも一致しており，人格構造モデルの妥当性を示す結果といえる。

TABLE11　「感情」と行動障害，心理障害との関連性

	困惑感	苛立感	無力感
行動□	①④⑩⑪⑫⑬⑲	③⑤⑨⑭⑮	
行動▽	②⑥⑯	⑳	⑦⑧⑰⑱
心理□	①②⑥⑲	③	⑧
心理▽	④⑩⑪⑫⑬⑯	⑤⑨⑭⑮⑳	⑦⑰⑱

「感情」では，次のような結果がみられた。「困惑感」では，行動，心理の障害の多様な状態が含まれているのに対して,「苛立感」では，心理▽がほとんどで，心理障害の意識化ができない傾向が示された。(唯一の例外③についても上述したとおりである)。また,「苛立感」

では行動□がほとんどで精神症状を示さない傾向がみられたのに対して，「無力感」では行動▽のみで精神症状が表れ易くなっていた。したがって，「苛立感」では防衛機能が発達しているのに対して，「無力感」は防衛が崩れやすく，症状が出やすいとみることができる。

以上の結果は，人格構造モデルからは，「苛立感」では，上部構造の適応強迫的性格が基底のシゾイドを自己愛的に防衛する形で構成されているため，他者の攻撃性を刺激し，苛立たせるという行動障害は示すが，その代わりにシゾイドの障害である心理障害を意識することはなく，またシゾイドの症状を示すこともないとの説明が可能である。それに対して，「無力感」では，上部構造の性格の防衛が未熟なため，シゾイドの病理が症状として直接に表れ易くなっているとの説明が可能である。これは，上記の「印象」と「感情」との関連性で示唆された「苛立感」「無力感」の特徴とも一致しており，人格構造モデルの妥当性を示唆する結果といえる。

4．ロ・テストによる検討

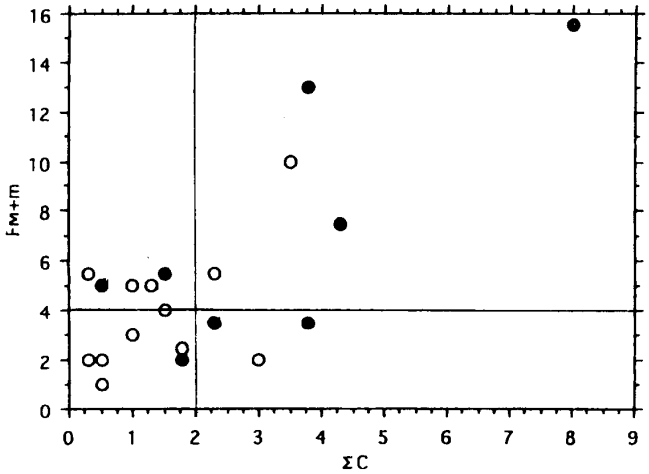
(1)　ロ・テストからみた「印象」の下位分類

「素朴型」と「警戒型」の比較を行うため，TABLE12にロ・テストの主要な指標の両下位分類の平均を示した。また，（　）内には村上・村上（1991）に記されている各指標の一般平均（修正BRSは0）より高い値を示した事例の，下位分類の全体に対する割合を示した。

TABLE12の結果から，「素朴型」「警戒型」の間でロ・テスト結果の傾向の違いが推測されたので，散布図をもとに両者の違いを検討することとした。

まず，縦軸をFM＋m，横軸をΣCとした散布図（FIGURE2）からは，素朴型にΣCあるいはFM＋mの値が比較的高い事例が多く，逆に警戒型にはΣCやFM＋mが低い事例が多く見られることが示されている。これは，警戒型に比較して素朴型の方が情緒性や衝動性などのエネルギーが強い傾向があることを示唆しており，この傾向は素朴型の修正BRSが高いことに関連していると考えられる。

次に，TABLE12から素朴型ではW％が高い事例が多いことが示されていたので，縦軸をW％，横軸を体験型の比率を示すΣC／Mの値として，散布図（FIGURE3）を作成した。その結果，「素朴型」事例は，事例⑧を除いて全てW％の正常成人の平均（46.7％）以上かつ3M＞3ΣC＞Mの領域内に含まれることが明らかとなった。事例⑧は，既述したように「印象」としては素朴であったが，「感情」では援助者に無力感を生じさせる事例であり，しかも素朴型で唯一修正BRSがマイナスであり，



※「素朴型」を黒丸●で示した（以下同）
※図内実線は平均を示す（以下同）

FIGURE2　FM＋mとΣCを軸とした散布図

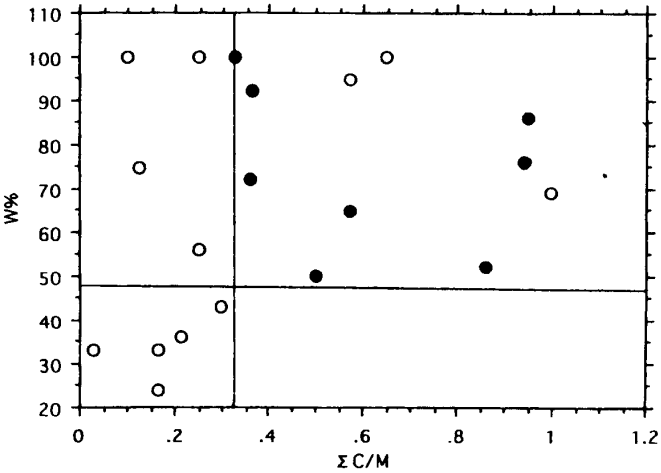


FIGURE3　W％と体験型を軸とした散布図

TABLE12　「印象」におけるロ・テストの主要な指標の平均と一般平均以上出現率

	R	修正BRS	W％	M	ΣC	FM＋m	Σc＋ΣC'
素朴型	28.8 (2／8)	6.4 (7／8)	74.1 (8／8)	5.3 (6／8)	3.3 (4／8)	6.9 (5／8)	2.2 (2／8)
警戒型	23.1 (4／12)	−4.8 (3／12)	63.7 (7／12)	5.8 (8／12)	1.4 (2／12)	4.0 (5／12)	1.6 (3／12)

「素朴型」のなかでも特殊な例である。なお，この領域には，「警戒型」が3事例入っているが，いずれも修正BRSがマイナスのものであった。したがって，W%が平均以上，3M>3ΣC>M，修正BRS>0という条件を設定した場合，これを全て満たすことが，事例⑧を除いた「素朴型」の事例を特定する条件となる。これは，「素朴型」の特徴として，想像力などの知的能力と情緒的な反応性のバランスは比較的よいが，融通性のない完全主義傾向がみられることを示唆しており，「素朴型」の特徴とも合致する傾向である。それに対して，「警戒型」では，明確に運動型を示す事例が多くみられ，運動型の程度において両下位分類で差異がみられることが推測された。

そこで，両下位分類間で体験型の比較を行うため，村上・村上（1991）の基準で運動型とされる12事例をみたところ，うち9事例が「警戒型」であった。またM>3ΣCの事例の出現率は，「素朴型」が1／8であるのに対して「警戒型」は9／12と高く，「警戒型」の方がMの割合の高い運動型が多いことが明らかとなった。これは，「警戒型」では，情緒反応性に比して対人的想像力が発達し，主観的になりやすい事例が多いことを示しており，防衛的な対人操作を示す「警戒型」の特徴をよく表す結果である。

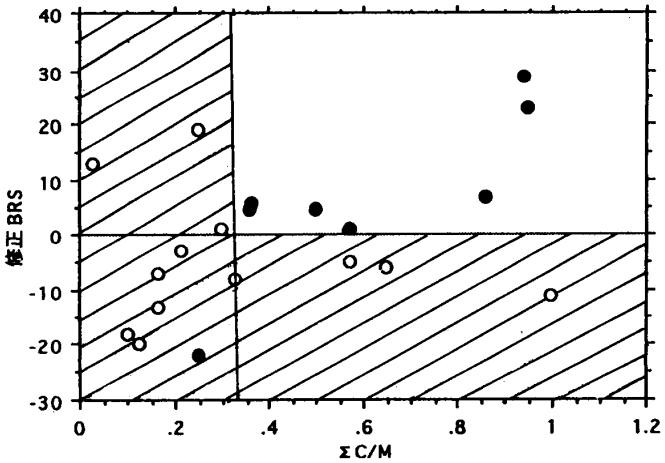


FIGURE4　修正BRSと体験型を軸とした散布図

以上の結果から，修正BRSの値と体験型の比率が両下位分類を分ける重要な基準と推測されたので，修正BRS>0またはM>3ΣCという条件（FIGURE4の散布図の斜線領域）で事例を選択したところ，③④⑤⑦⑧⑨⑩⑭⑮⑰⑯⑱⑳となり，⑧を除いて「警戒型」の事例と一致した。上述したように⑧は「素朴型」の中でも特殊な例であるので，「警戒型」は心理的適応状態の指標である修正BRSの低さと極端な運動型という2つの傾向から構成されていると考えてよいと思われる。この結果は，「警戒型」が不適応傾向の強い群と防衛的な対人操作に長けている群の両群から構成されていることを示唆するものである。

(2)　ロ・テストからみた「感情」の下位分類

上記結果において「警戒型」は不適応な群と防衛的な群から構成されていることが示唆された。これは，「警戒型」が「感情」の下位分類では「苛立感」「無力感」「困惑感」のそれぞれに分化することと関連があると推測される。そこで，TABLE13で「警戒型」を〔修正BRS<0〕群，〔修正BRS<0かつM>3ΣC〕群，〔M>3ΣC〕群に分け，「感情」の下位分類との対応を検討した。

TABLE13　「警戒型」下位群と「感情」との対応

感情＼群	修正BRS<0	修正BRS<0かつM>3Σ	M>3ΣC
困惑感		④⑩	
苛立感	⑮	⑨⑭	③⑤⑳
無力感	⑦⑰	⑱（⑧）	

TABLE13の結果をみると，「苛立感」6事例のうち5事例がM>3ΣCを示し，「無力感」4事例（事例⑧を入れた場合）のうち4事例が修正BRS<0を示している。M>3ΣCのような極端な運動型は，想像力や対人能力はある反面，現実性や他者との情緒交流性に欠け，主観的になりやすい傾向があるとされる。これは，対人操作を巧みに行うことで自己の主観的な世界を防衛する傾向を示すもので，「苛立感」の対人行動パターンと一致する。特に，想像力や主観性は，「苛立感」の人格構造の上部構造である適応強迫性格の特徴として想定された自己愛性とも合致する内容である。

また，修正BRSの低さは，全体としてのエネルギーの低下や現実適応能力の障害を示すものである。これは，「無力感」が示す人格障害の重さと一致する。特に，現実適応能力の障害は，「無力感」の人格構造の適応強迫性格の特徴として想定された防衛機能の弱さとも合致する内容である。

上記結果は，標本数が少なすぎることや修正BRS<0とM>3ΣCが重複している事例が多いことなどから，下位分類との関連で検討されていた人格構造モデルの妥当性を検証するものとはいえない。しかし，仮定されている人格構造モデルによる下位分類の説明を支持する内容とはいえる。

5．ロ・テストの全体傾向による検討

以上，下位分類との関連でロ・テストの結果を検討した。そこで，以下では，ロ・テストの全体傾向を，仮定

されている人格構造との関連で検討する。

20例のうち，村上・村上（1991）の基準で運動型とされる事例が12例みられた。このことからもわかるように，全体傾向としてMの出現率が高いことである。知的能力，想像力，対人的共感能力を示すとされるMの出現率が高いことは，他者の期待を先取りして適応的に振舞うS・Aの性格と重なる結果である。この点で，Mの多さや運動型の多さは，人格構造モデルの上部構造である適応強迫性格の存在を支持する内容といえる。

次に注目されるのは，全体的にΣC，Σcの出現率が低く，情緒反応性の希薄な事例が多いことも示された。これは，他者との情緒的交流が希薄なS・Aの対人関係の特徴とも重なる結果である。上述したように知的能力を示すMが比較的多く，情緒的反応性を示すΣCやΣcが少ないことは，人格構造モデルの基底構造として仮定されている知性と情動の分裂（シゾイド）の存在を支持する結果である。

また，現実適応の指標である修正BRSがマイナスである事例が10事例（「無力感」4事例は全てその中に含まれていた）みられた。これは，人格構造との関連では，上部構造の適応強迫性格が機能しない場合には，シゾイドの障害が不適応として表れるとの説明も可能である。

なお，心理的葛藤を示すとされるΣmは，比較的多くみられた。S・Aでは，自己の現実の深刻さを実感し，それを自己の問題として「悩めない」つまり葛藤とすることができない心理障害が見られることは既述した通りである。このS・Aの特徴とΣmの存在は，矛盾しているようにも思える。しかし，このように「悩めない」心理障害をシゾイドの病理とみた場合には，知性と情動の分裂の表れと解釈できる。つまり，「悩めない」心理障害を「知性優位で情動の欠如」による実感の希薄化によって生じた現象とみることができる。その場合には，S・Aの悩めなさは，上記のMの多さとΣC，Σcの少なさと関連しているとの説明が可能である。

以上みたように，ロ・テストの結果は，全体としてS・Aの分類概念モデルと人格構造モデルにそった内容といえる。

全体討論

以上みたように分類概念モデルに基づいて仮定された人格構造モデルは，下位分類の差異を説明することができ，しかもロ・テストの結果もその説明を支持する内容であった。したがって，問題となっている現象を適切に説明し，臨床的介入の際の有効な視点を提供できることを臨床的妥当性とするならば，上記人格構造モデルには臨床的妥当性が認められるといえる。具体的には，「つなぎ」モデルによる援助的関わりを行った場合に援助者に生じる「印象」や「感情」からの概念の下位分類を行い，その説明となる人格構造を想定し，推測される障害に適した介入を行うことが可能となる。

本研究では，人格の基底構造における知性を情動の分裂（シゾイド）とその上部構造における適応強迫性格（偽りの自己）を指摘したが，先行研究でS・Aをシゾイドとの関連性を指摘した研究はなく，その点が本研究の独自性である。そこで，以下において，下位分類の先行研究と本研究の下位分類を比較し，本研究の意義を明らかにする。

既述したように葛藤型と無葛藤型の分類が「葛藤」の表出を分類基準とする点は，本研究の「素朴型」と「警戒型」の分類が「困惑」の伝達の有無を分類基準とする点と類似してるともいえる。しかし，「素朴型」は，当事者の困惑が援助者に伝わり，感情交流の可能性を感じさせるものの，その困惑が葛藤や悩みにならないことが特徴である。したがって，この点で両者は明らかに異なる。実際，島崎・竹内（1981）や加藤（1990）の葛藤型についての記述をみると，DSMⅢRのアイデンティティ障害に分類されるような葛藤が前面に出ている事例が含まれているが，本研究では，そのような事例は「素朴型」に含まないどころか，S・Aの概念そのものにも含ない。

単一型・複合型の分類は，症状の有無が分類基準となっている。それに対して，本研究では，症状の有無は下位分類の基準にはなっていない。症状に関しては，同じ症状であっても，「困惑感」の症状と「無力感」の症状では意味が異なるとする。「無力感」では基底構造のシゾイドがそのまま表れたものと想定されるのに対して，「困惑感」では上部構造の適応強迫性格の防衛機能が低下した結果一時的に表れたものと想定しており，ロ・テストの結果（特に修正BRSの値）もそれを支持する内容である。このように本研究では，症状はあくまでも人格構造モデルから説明できる分類概念の枠内の事象としてとらえており，他の疾患の症状を複合を想定する複合型のとらえ方とは基本的に異なっている。

なお，土川（1990）の受動回避型と自己愛型の下位分類と，人格構造モデルの適応強迫性格における受動性と自立性の区別と重なる点がある。しかし，本研究では，適応強迫性格は人格構造の上部構造であり，その基底にはシゾイド性格があることを前提とし，それとの関連で下位分類は単純に受動性と自己愛性の2分法とはならないとしており，その点で相違がある。具体的には，本研

究の下位分類で自己愛性の特徴をもつ「苛立感」は，自己愛的防衛が機能するために症状を呈する可能性が低くなっており，自己愛型を複合型とする土川の概念とは異なる。

引用文献

馬場禮子（編著）(1983)：境界例－ロールシャッハ・テストと精神療法－．岩崎学術出版社.

Guntrip, H., 1968 The Schizoid Personality and the External World. 狩野力八郎（訳） 分裂的パーソナリティと外的世界. 小此木啓吾（編） 精神分析・フロイト以後至文堂 129-146.

Glauber, I, P., 1949 Observation on a primary form of anhedonia, Psychiatric Quarterly, 18,67-78.

林昭仁 1990 スチューデント・アパシーへの対応－来談者中心療法的アプローチ－ 土川隆史（編） スチューデント・アパシー 同朋舎 199-215.

石井完一郎 1981 スチューデント・アパシーとは?. 石井完一郎・笠原嘉（編） 1981 スチューデント・アパシー（現代のエスプリ NO168） 至文堂 66-70.

Kantor, M,. 1992 Diagnosis and treatment of the personality disorders. Ishiyaku EuroAmerica Inc.

笠原嘉 1978 退却神経症withdrawal neurosisという新カテゴリーの提唱. 中井久夫・山中康裕（編） 思春期の精神病理と治療 岩崎学術出版 287-319.（笠原（1984）に再録）

笠原嘉・成田善弘 1979 アパシー・シンドロームをめぐって 精神医学, 21(6), 585-591.（笠原（1984）に再録）

笠原嘉・山田和夫（編） 1980 キャンパスの症状群 弘文堂.

笠原嘉 1981 スチューデント・アパシー第三報. 石井完一郎・笠原嘉（編） スチューデント・アパシー（現代のエスプリ NO168） 至文堂 24-28.（笠原（1984）に再録）

笠原嘉 1984 アパシー・シンドローム－高学歴社会の生年心理－ 岩波書店.

笠原嘉 1988 退却神経症－無気力，無関心，無快楽の克服－ 講談社.

加藤雄一 1990 いわゆるスチューデント・アパシーについての臨床的検討－N大学における－ 名古屋大学学生相談室紀要, 2,25-35.

湊博昭 1990 学校と青年期 スチューデント・アパシー 臨床精神医学, 19(6), 855-860.

村上宣寛・千恵子（1991）：ロールシャッハ・テスト－自動診断システムへの招待－. 日本文化科学社

小川豊昭 1992 スチューデント・アパシー－ナルシシズム論からの力動的理解－ 若林愼一郎（編） 青年期の病理と治療 金剛出版 117-142.

岡庭武 1983 大学生神経症研究班報告－student apathyのまとめ－ 第4回精神衛生研究会報告書, 36-40.

小此木啓吾 1984 シゾイド人間 講談社.

島崎素吉・竹内龍雄 1981 いわゆるstudent apathyについて－筑波大学での経験から－ 第2回大学精神衛生研究会報告書, 99-106.

下山晴彦 1987 学生相談における新たな心理臨床モデルの提案－関係性の理念に基づく「つなぎ」モデル－ 東京大学学生相談所紀要, 5,11-29.

下山晴彦 1990 「絵物語法」の研究－対象関係仮説の観点から－ 心理臨床学研究, 7(3),5-20.

下山晴彦 1994 つなぎモデルによるスチューデント・アパシーの援助－「悩めない」ことを巡って－ 心理臨床学研究, 12(1),1-13.

下山晴彦 1995 境界例援助における「手応え感」の意味－「つなぎ」モデルにおける個人と家族 心理臨床学研究, 13(1),13-25.

下山晴彦 1995 スチューデント・アパシーの構造の研究－モデル構成現場心理学の試みとして－心理臨床学研究13（3）

土川隆史 1981 スチューデント・アパシー 笠原嘉, 山田和夫（編） キャンパスの症状群 弘文堂 143-166.

土川隆史 1985 スチューデント・アパシーと生活のリズム 教育心理, 33,771-773.

土川隆史 1989 大学生のアパシー－スチューデント・アパシー再検討－ 清水将之（編） 青年期の精神科臨床 金剛出版 227-239.

土川隆史（編） 1990 スチューデント・アパシー 同朋舎.

土川隆史 1992 アパシー学生への援助技法 全国学生相談研究会議（編） キャンパスでの心理臨床 至文堂, 132-143.

牛島定信 1983 境界例とスキゾイド論 西園昌久（編） 青年期の精神病理と治療 金剛出版社. 242-255.

Walters, P. A. J,. 1961 Student Apathy Blaine B. Jr. & McArthur C.C.(ed) Emotional Problem of the Student Appleton-Century-Crofts. 笠原嘉, 岡本重慶（訳） 1975 学生のアパシー 石井完一郎（監訳） 学生の情緒問題 文光堂, 106-120.

Winnicott (1965) : The Maturational Process and the facilitation Enviornment. 牛島定信訳（1977）：情緒発達の精神分析理論. 岩崎学術出版社.

山田和夫 1987 スチューデント・アパシーの基本病理－長期縦断的観察の60例から－, 平井富雄（監修） 現代人に心理と病理 サイエンス社, 355-373.

山田和夫 1989 境界例の周辺－サブクリニカルな問題性各群－ 精神療法, 15(4),350-360.

TABLE5　事例情報の要約（秘密保持のため一部内容に若干の変更を加えた）

事例記号（来談時の年齢，学年，学部）
Ⅰ．学業回避期間（来談時まで）／学業回避の契機
Ⅱ．来談経路／回避期間における活動
Ⅲ．面接時の印象
Ⅳ．家族状況：父親／母親／同胞／児童期の特徴／親子関係
Ⅴ．援助経過
Ⅵ．援助者側に生じてきた感情
Ⅶ．媒介関係者／大学生活の結末／相談の結末／その後

事例①
A（27歳，博1，工学部）
Ⅰ　1　2　3　4　5　修1　2　博1／人間関係がうまくいかなくなり，昼夜逆転したため
Ⅱ　教→本　／　卓球，パソコン
Ⅲ　人当たりがソフトで細かな気遣い。優しすぎる。耐性が弱い。
Ⅳ　父：研究者。身体障害／母：研究者。しっかり者／長男，弟1／期待を先取りした優等生。クラス委員長，いい子／配慮。
Ⅴ　否認は弱く，登校を試みるが短期間で不登校となり，面接も中断となることの繰り返し。「優等生だったので，自分がなく，自然に楽しいと感じたことがない」と心理障害を語り，自己理解は進んだが，現実に直面すると容易に生活のリズムが乱れ，閉じこもる。家族に対しては不適応を隠し続け，見つかっても否認。適応志向性が強い。
Ⅵ　現実で自己主張できる強さがなく，困惑しつつ回避を繰り返すので，援助者としては〈困った者だ。もう少し強くなればいいのに〉と呆れながらも，共感的でいられた。
Ⅶ　教，母／些細な現実的困難で閉じこもり，研究の進展がない／2年半後に後任のカウンセラーに引継／博士課程に在学（閉じこもり気味）

事例②
B（26歳，学4　法学部）
Ⅰ　1　2　3　4　5　6　7　8／試験受けるのがイヤで
Ⅱ　本（退学直前の試験で不安となり来談）　／　塾講師，映画
Ⅲ　太っていることもあり，腰が重く，動きが鈍い印象。怯えを隠すような愛想笑い。
Ⅳ　父：無職，身体障害／母：幼児期に両親を失い，苦労して育ち，独学で塾の教師兼経営者／長男，弟1／父親が身体障害のため，家族の期待を一身に集めていた。おとなしい，いい子／黙従
Ⅴ　試験恐怖のため試験受けられず，退学。通信制大学に編入学するが，当初は現実感なく，相談も中断と呼び出しの繰り返し。やりたいことがないと語り，次第に内面的な話となるが，情緒レベルの話となると恐怖感が出てきて回避してしまう。
Ⅵ　持続力がなく，容易に現実逃避するので，〈だらしない。何をそんなに怯えているのか〉と言いたくなるが，ある種の人なつこさがあり，憎めない。
Ⅶ　母／2年後に通信制大学の卒論を書き，卒業／2年後に中断／就職できず，塾講師のアルバイト

事例③
C（25歳，修1，理学部）
Ⅰ　1　2　3　4　5　修1　2／学部ではサークル活動で，修士入学後はアルバイトで忙しくて
Ⅱ　教→親・本　／　アルバイト（コンピュータプログラム，塾講師）
Ⅲ　表面的には強気で弱みを見せない。しかし，困難時は全く動けなくなる弱さがある。
Ⅳ　父：大手会社員。多忙。海外単身赴任（10歳～高校）／母：父親を思春期に失い，男性イメージが希薄／長男，妹1／成績優秀で手のかからない子／黙従
Ⅴ　当初は否認，分裂行動が強く，相談も中断が繰り返された。次第に自分のなさや実感のなさを語るようになるが，心理障害は改善されず，張りのなさは継続。活動力があり，知的に優秀。批判に過敏で自己愛的な適応性が強い。
Ⅵ　自己の弱さを否認して都合のいいことだけ語る態度に〈調子のいい男だ〉と苛立ちを感じた。
Ⅶ　教，父，母，伯母，友人／自己理解が進み，教授に相談できるまでにはなったが，学業復帰はできず，3年後に退学／3年後に終了／コンピュータ会社就職

事例④
D（25歳，学4　工学部）
Ⅰ　1　2　3　4　5　6　7／朝起きれず，遅刻がちになって
Ⅱ　教→教＋本　／　読書，パソコン，サイクリング
Ⅲ　礼儀正しく，穏やかだが，淡々として感情の動きが伝わってこない。冷めている。
Ⅳ　父：会社員，多忙で転勤が多い。単身赴任（中学，大学）／母：2歳で父親を亡くし，男性がよく分からないとのこと／長男，妹，弟

各1／要求のないおとなしい子／配慮

Ⅴ　学業は時々回避がみられたが，相談は定期的に来談。当初は，現実的なこと，内面に関することは話題にできず，コンピュータや読書の話が多く，その点で否認がみられた。大学生活はなかったようなものと現実感のなさを語り，味気なさや張りのなさが強くみられた。次第に夢や絵物語を通して，間接的ではあるが，感情レベルの事柄を表現できるようになった。

Ⅵ　否認がみられたものの，面接していてことばにならない無力感が伝わってきていたので，援助者として〈彼も困っているだろう〉という気持ちを維持できた。

Ⅶ　教，母／教官の理解と協力により，本人が復帰しやすい環境が整えられ，ぎりぎりで卒業／1年後に終了／教官の友人の会社に就職。

事例⑤

E（25歳，修1　理学部）

Ⅰ　1　2　3　4　修1　2／卒論が書けなくて（ただし，卒論不十分のまま内部推薦で院進学）

Ⅱ　教→本　／　読書

Ⅲ　知的な話の時は人なつこく，都合が悪い話の時はさっと身を引く臆病さ。知性化が強い。

Ⅳ　父：4歳の時病気で死亡。闘病生活長く，子供として気を使っていた。厳しい父親のイメージしか残っていないとのこと／母：働きながら，父親役割で厳しく子供を育てた／長男，妹1／母親を絶対視。いい子／従順

Ⅴ　知的興味の幅は広いが，自己のオリジナリティや現実的行動を求められると収拾がつかず，閉じこもり，面接も中断となる分裂回避が繰り返された。自分には核になるものがないと語るが，それで悩むわけではなく，表面的な話が多く，情緒レベルが見えてこない。

Ⅵ　都合がよい時には調子よくしゃべり，都合が悪くなると閉じこもる分裂した行動に対して〈調子がいい奴だ。勝手にしろ〉という苛々の感情がわいてきた。

Ⅶ　教，母／論文をまとめなければならない時期に回避，閉じこもりを繰り返し，呼び出しても応じないことが続き，中断となった／1年後に中断／2年後に教授の協力を得てギリギリで卒業し，コンピュータ関係に就職

事例⑥

F（24歳，学3，経済学部）

Ⅰ　1　2　3　4　5／授業に興味がわかないので

Ⅱ　親→本　／　サークル（映画），パチンコ，麻雀，アルバイト（塾講師，宅配）

Ⅲ　几帳面に問題解決を約束するが，融通性に欠ける。まじめ，対人緊張。硬さと脆さ。

Ⅳ　父：研究者。単身赴任（中学～高校）。気弱。まじめ／母親：元教師で教育熱心，支配的。感情的／長男，姉，妹各1／母親の方針通りに進学。まじめ／服従

Ⅴ　回避期間が長く，退学が迫っていたので否認は弱い。問題解決を約束するが，実際は動けず，不安が高まり閉じこもる分裂した行動が繰り返された。3年後より家族への攻撃的行動化が顕在化。心理障害は言語化されるが，改善されなかった。強迫性が強い。

Ⅵ　分裂行動を繰り返すが，態度から困惑している心理状態が感じられたので，援助者としても〈何とか援助したいという〉気持ちを維持できた。

Ⅶ　事務，父，母，医師，友人／感情が出てくるが，葛藤にならず，行動化となる。友人もでき，一時は授業に出て試験を受けられるようになったが，試験に失敗し，不安感が強くなる。4年後に退学／5年後に地元のカウンセラーに引継／実家に戻り，無職。

事例⑦

G（24歳，学4，文学部）

Ⅰ　1　2　3　4　5　6／卒論が遅れているのを知られるのがいやで

Ⅱ　教→本／サークル活動（歴史研究）

Ⅲ　対人緊張が強く，思考や行動が強迫的。感情表現がなく，恥をかくことを恐れる。

Ⅳ　父：研究者，温和，細やかな配慮がある／母：神経質で潔癖症。教育熱心。厳しい／一人っ子／祖父母に可愛がられ，人見知りが強い子。運動が苦手でいつも一人で本を読んでいた／黙従

Ⅴ　完全に現実を回避し，サークルの資料収集を強迫的に行なっており，面接でも否認，分裂行動が多く，遅刻，中断が繰り返された。話題がないため，イメージ技法でつなぎとめたり，具体的な進路指導を行なったりしたが，情緒的な交流は困難であった。ただ，父親が再三上京し，本人を促し，援助関係を維持するのに協力してくれたので長期間援助関係は続いた。

Ⅵ　非常に防衛が強く，援助者としては〈面接関係を維持するのは無理だろう。何か変化の可能性はあるのだろうか〉と無力感を常に感じていた。

Ⅶ　教，父／来談2カ月後に退学となり，1年後に再入学。完全癖が強く，卒論や進路の問題でも細部に拘って動けなくなる。父親と教官の協力で何とか卒論を書きあげ，卒業。4年後に地元の大学院に進学／4年後に終了／実家に戻り，大学院進学

事例⑧

H（24歳，学2，理学部）

Ⅰ　1　2　3　4　5／大学入学のためだけの勉強だったので，入学後気力がなくなって

Ⅱ　（教→本）本（入学2年目に教官に促されて一時来談したが中断）。今回は退学回避のため休学の診断書が必要となり来談／ファミコン，ゲーセン，パチンコ，家庭教師

Ⅲ　追い詰められて動けなくなっている感じ。すまなそうな愛想笑いをする。オドオドした印象。
Ⅳ　父：幼児期に両親と離別，貧しい生活。中卒。仕事を転々とした後，妻の実家の病院勤務／母：医者の娘。厳しく，恐い人。母の実家に家族で住む／次男，兄1／子供の頃は母親には怒られた覚えしかなく，びくびくしていた。祖父に可愛がられた／服従
Ⅴ　来談時は身体の不調（微熱，胃の不快感）やガン不安を訴えていたが，1年間の休学決定後には軽快。アパシー期間が長く，退学も迫っていたため当初は否認は弱く，「自分はやりたいことがなく，現実感もない」と心理障害を語る。しかし，休学後には次第に来談が続かなくなった。4カ月後に中断，6カ月後には連絡不通。
Ⅵ　愛想のよさ下に深い恐怖感が感じとられ，中断が繰り返された時点で，〈つなぎとめるのは無理だろう〉との無力感が強くなった。
Ⅶ　医／1年半後に実家で連絡先をきき，電話をしたところ，「復学後1年間母親が上京，同居し，生活の管理をしてもらうことで通学し，進学できた。先日母が帰郷したので，今後が不安」とのこと／4カ月後に中断，1年半後フォローアップ／在学中

事例⑨
I（24歳，修1，工学部）
Ⅰ　1　2　3　4　修1（内部推薦で院には進学）／何となく授業に興味がもてなくなって
Ⅱ　教→教＋本　／　ファミコン，パソコン，読書
Ⅲ　ニコニコしている反面，プライドが高く，知的万能感がみられ，弱みをみせない。
Ⅳ　父：高卒で妻と2人で自営業。多忙／母：仕事が忙しく，子供は放任／長男，弟1／責任感強く，気遣いできる子。スポーツは苦手で本ばかり読んでいた／配慮
Ⅴ　否認が強く，好きな本の話などの知的万能感に関わる話は得々とするが，現実場面で都合悪くなると閉じこもり，相談も回避する分裂した行動が繰り返され，1年後に中断。抽象的な話が多く，心理障害の言語化はなく，情緒的表出は乏しかった。
Ⅵ　現実では動けないにもかかわらず，知的万能感が強く，周囲を馬鹿にする態度に対して苛立ちを感じた。
Ⅶ　教，母，医師／教官の協力にもかかわらず，研究室に戻ることができず，1年3カ月後に自主退学／1年後に中断／小さなコンピュータ会社に就職

事例⑩
J（24歳，学3，工学部）
Ⅰ　1　2　3　4　5／授業に出られない時があるとすぐに諦めてしまって
Ⅱ　教→母＋本　／　パチンコ，家庭教師
Ⅲ　強圧的な父親を避けて隠れている感じ。優しく繊細，感情を表に出さない。
Ⅳ　父：養父母に育てられ，苦労。会社員で転勤多い。単身赴任（小学5年～現在），家庭内ではワンマン，支配的。酒乱／母：夫に服従／長男，弟1／細かなことに気のつくいい子。母子で父親の機嫌を損ねないよう父親の意向に合わせてきた／配慮
Ⅴ　退学寸前であったが，教官の協力で進学。その後弟もアパシーであることが判明。弟の家出を契機に母親が家族関係の見直しを始め，家族力動の変化が生じ，その中で本人も少しづつ意見を言うようになった。しかし，家族への配慮が先立ち，自己の行動や心理について語ることはなく，その点では否認がみられた。
Ⅵ　家族力動の変化のなかで誠実に動いている様子をみて，否認はあるが，これはこれでいいのだろうと納得。
Ⅶ　教，母／教官の協力により半年後に研究室に復帰し，1年後に卒業／10カ月後に終了／知人の紹介の会社に就職

事例⑪
K（23歳，学3，工学部）
Ⅰ　1　2　3　4　5／何回かさぼったら授業に出るのが気が重くなって
Ⅱ　教→親→教＋父＋本　／　ファミコン，パソコン
Ⅲ　大きな体を小さくして愛想笑い，大丈夫ですと言いながらオドオド，隠された怯えが感じられた。
Ⅳ　父：会社員，多忙，19回転勤，単身赴任（2歳～高校まで3年おきに），厳しい／母：真面目，厳しいというわけではない／全て自分でやる，手のかからない子。スポーツマンで高校時代にはクラブで全国大会出場／長男，妹，弟各1／配慮
Ⅴ　人なつこさがあり，パソコンやスポーツの雑談ならできるが，それ以外の現実的なことや心理的なことには言及できず，否認がみられた。1年後には授業に出るようになったが，困難に直面すると容易に分裂回避し，閉じこもり，相談も一時中断となった
Ⅵ　分裂回避を繰り返す時には〈だらしない，情けない男だ〉とは思うが，呼び出して来談した時の人なつこさに接すると〈本人も困っているのだろう〉と共感的な気持ちになる。
Ⅶ　教，父，母／一時は研究室に戻ったが，就職の失敗を契機に再び回避状態となる／2年後に後任のカウンセラーに引継／在学中（閉じこもり気味）

事例⑫
L（23歳，学3，工学部）
Ⅰ　1　2　3　4／専門が自分のやりたいことでないと思い初めて
Ⅱ　教→本／映画，ビデオ，読書
Ⅲ　素直で人なつこいが，空想的，抽象的話が多く，現実性，具体性がない。
Ⅳ　父：公務員，命令口調でうるさい／母：教育熱心，くどい／長男，姉，妹各1／反抗はしなかったが，親は嫌いで口をきかない／黙従

Ⅴ　授業には全く出ていないが，そのことを扱えず否認。映画や読書の話は嬉しそうに話し，現実感や生活感が感じられない。半年後より定期的に来談するようになり，やりたいことない，つまらないという表現で心理障害に言及するが，それをテーマにすることはない。
Ⅵ　現実感のなさに対して，〈考え方が甘い。これでは，現実的に動けないわけだ。どうしたらいいのだろう〉と，援助者の側が困惑してしまう。しかし，とても素朴なので苛立ちまでは生じない。
Ⅶ　教／来談は定期的であるが，現実レベルでの変化はみられず，将来の具体的展望もなく，現実回避が続いた／1年後に後任のカウンセラーに引継／在学中（不登校）

事例⑬
M（23歳，修1，理学部）
Ⅰ　1　2　3　4　修1／研究室の先輩とうまくいかずに（内部推薦で院進学）
Ⅱ　教→父＋本　／　ドライブ
Ⅲ　人なつこく，愛想がよいが，現実認識甘い。がまんできずにすぐ逃げてしまう。
Ⅳ　父：大手会社役員。多忙。会社中心の生活／母：優しい／一人っ子／何も問題のない，素直でいい子／従順
Ⅴ　教官の協力もあり，一時研究室に復帰したが，続かず，不登校。面接でも否認や分裂がみられ，中断が繰り返された。やりたいことが分からない，自信がないと単なる人間関係の問題でないことを語るが，それから先に進めない。
Ⅵ　〈だらしがない。もう少し何とかならないか〉という諦めに近い感情。
Ⅶ　教，父／都合が悪くなると容易に面接も回避。持続しない。中断が繰り返され，1年後より連絡不通。2年後に父に連れられて来談し，退学の手続きをしたことを報告／1年後に中断／2年後に退学，実家に戻り無職

事例⑭
N（22歳，学3，工学部）
Ⅰ　1　2　3　4／試験でつまづいた後何となく出なくなって
Ⅱ　教→親→本／パチンコ，ゲーセン，塾講師
Ⅲ　周囲に気を使い，調子を合わせる反面，都合が悪くなると逃避し，失敗を隠す。
Ⅳ　父：公務員，口喧しい／母：厳しい，ヒステリックになり，感情的に怒る／長男，弟1／要求のない，いい子／黙従
Ⅴ　一方では適応を装いつつ，実際は分裂による回避行動を続け，周囲をイライラさせることを続けた。都合が悪い時は回避を続け，それが見つかってもあっけらかんとしており，否認が強かった。行動障害が前面に出ていたので，心理障害がテーマとなることはなかった。
Ⅵ　混乱した周囲の関係調整のために援助者がたいへんな労力を要したにもかかわらず，本人は相変わらず分裂行動を繰り返すので，〈勝手にしろ〉との苛立ちが生じた。
Ⅶ　父，母，医師／母親が上京し，同居したが，分裂回避行動は続き，面接も中断が繰り返された／2年後に一時中断，2年半後に近況報告に来談し，終結／2年後に退学，2年半後に他大学の医学部を再受験し，合格

事例⑮
O（22歳，学3，工学部）
Ⅰ　1　2　3　4　5／単位さえとればいいと考えていて
Ⅱ　教→本／アルバイト（ウエイターその他），麻雀，映画
Ⅲ　一見愛想がいいが，感情が伝わってこない。話していて手応え，現実感がない。冷淡な印象。
Ⅳ　父：銀行員，話さない／母：教員，管理職でしっかりしている／次男，兄1／親との対立はないが，会話もない／黙従
Ⅴ　理系に興味を失ったというので文系への転学の話をしたところ本人もそれを希望。しかし，自分のやりたいことがないので転学を利用しようとしただけで，そのための準備等については分裂回避。結局教官の協力で転学が行なわれた。
Ⅵ　一貫してみられた他人事のような態度に対して，援助者の側に〈結局利用されただけだ。一体どういうつもりなんだ〉という被害的な苛立ちが生じてきた。
Ⅶ　教／来談は継続せず，呼び出して来談することが続き，転学の手続きに関しても他人事のように無責任な行動を繰り返した／1年後に転学が決まった直後に中断／1年後に転学，しかしその後も不登校（伝聞）

事例⑯
P（21歳，学2，工学部）
Ⅰ　1　2／朝起きれなくて
Ⅱ　教→本／ファミコン
Ⅲ　淡々とファミコンの話をし，感情表出は少ない。冷めている。一人でいることを好む。
Ⅳ　父：会社員，無口／母：神経質，ヒステリー，ちょっとしたことで感情的になる。成績が良ければ安定／長男，姉1／親からみるといい子，しかし本人によれば意見を通そうとすると母親が感情的に不安定になるので諦めて従っていたとのこと／服従
Ⅴ　当初は，親や学校への不満を語っていたが，そこから自己理解が進むことはなく，途中からはファミコンの話ばかりとなる。現実を否認し，いやなことをやらなくて済む現状に満足しており，それ以上のことを考える意欲を示さなかった。
Ⅵ　現実を否認したまま淡々としていたため，〈このままでいいのか〉との焦りは生じたが，苛立ちや怒りは感じなかった。
Ⅶ　教，父，母／休学をしたため，人と関わらないで済み，登校刺激もなかったので淡々と過ごしており，定期的に来談／1年半後に後任のカウンセラーに引継／在学中（不登校）

事例⑰
Q（21歳，学2，理学部）
Ⅰ　1　2　3／勉強をやる気がなくなって
Ⅱ　教→本　／　ファミコン，アルバイト（交通整理）
Ⅲ　全体的に活気がなく，ぼんやりしており，感情表現が乏しい。
Ⅳ　父：公務員，生来の身体障害，優しい／母：感情的，支配的，はっきり意見をいうきつい性格／三男，兄2，弟2，妹2／小，中でいじめられ体験。高2から意欲低下。家ではおとなしい，優しい子／配慮
Ⅴ　当初は憂うつ感，被注察感を語ったが，休学後には軽減。本人は否認したが，明らかな意欲減退がみられたので，精神疾患の可能性も考慮し，精神科医を紹介。しかし，通院を回避。診断は未確定。家を出て図書館で過ごすといった生活を続け，特に家族に対する否認がみられた。現実的対応が必要な時期になると分裂回避がみられた。
Ⅵ　面接では自発的発話が少なく，コミュニケーションがとりにくい。ボーとしていることが多く，シゾイドが前面に出ており，〈関係を維持することが難しい〉と無力感を感じた。
Ⅶ　教，父，母，医師／休学中は定期的に来談。1年半後に復学となったが，登校ができず，それを家族には否認，その後来談も中断／1年半後に中断／2年後に退学

事例⑱
R（20歳，学2，工学部）
Ⅰ　1　2　／勉強やる気なくなって
Ⅱ　教→親→母＋本　／　バイク，アルバイト（運転助手）
Ⅲ　型通りの話しかできず，感情表現がない。ニコニコしながらも冷めていて皮肉っぽい。
Ⅳ　父：会社員，多忙，単身赴任（小1～小6）／母：自信がない。こどもを頼りにしていた／長男，姉1／小学校では生徒会長，責任感の強い優等生／配慮
Ⅴ　来談当初抑うつ感が見られたので精神科医を紹介したが，休学決定後には消失。アルバイトには楽しそうに通い始める。しかし，来談に関しては約束するが，来ないという分裂した行動が繰り返された。来談しても否認があり，心理障害については語らなかった。
Ⅵ　話していても情緒的つながりが感ぜられず，中断するとストンと切れてしまう感じがして関係を維持しようとの意欲を持てなかった。
Ⅶ　教，母，医師／半年の休学を挟んで復帰したが，不登校が続き，相談も中断／半年後に中断／2年後に退学，地元に戻り専門学校に入学

事例⑲
S（19歳，学1，工学部）
Ⅰ　1／授業をさぼって好きなことをやろうと思って
Ⅱ　教→本　／　サークル（音楽）
Ⅲ　素直。おとなしい，自分の生活のコントロールができない。幼い感じ。
Ⅳ　父：会社員，多忙／母：看護婦，きつい／長男，妹1／共働きなので小さい頃，昼間は近所に預けられていた。父親については何故あんなに働くのかと思い，母親はきつくて本当のこと言えない，勉強はやらされていたのでやっていたとのこと／従順
Ⅴ　現実認識が甘く，生活のコントロールができないため，容易に生活のリズムが乱れ，閉じこもる生活となった。生活実感がなく，心理障害がみられ，本人もそれを意識できたが，それを話題とすることはできず，面接では雑談に終始。ダラダラと現実回避した生活を続け，留年を繰り返した。見かねた親が本人を実家に連れ戻し，そこから遠距離通学を始め，多少生活のリズムが戻った。
Ⅵ　人格の未熟さが感じられ，成長には時間がかかると思われた。しかし，19歳と早い時期に来談したので，援助者の側ではじっくり援助できるとの余裕がもてた。
Ⅶ　教，母／当初は中断も見られたが，2年後からは定期的に来談。次第に登校も定期的となる／3年後に後任カウンセラーに引継／在学中（通学）

事例⑳
T（23歳，事1，大学職員）
Ⅰ　1／体調が悪く（ふらふらする）
Ⅱ　上司→事＋本　／　読書，小説の執筆
Ⅲ　愛想がいいが，自己愛的，非現実的で，都合悪くなると容易に中断する冷淡さ。
Ⅳ　父：会社員，転勤が多い／母：高校時に病気で死亡／一人っ子／おとなしい，手のかからない子／従順
Ⅴ　新入の4月早々に貧血といって休み，検査で異常がないと腹痛といって休む。休職の手続きをした後は来談し，自分の興味ある心理学の話を満足気に話し，非現実的な空想を語るが，休職が切れると閉じこもり，連絡を一切断ってしまう否認，分裂した行動を繰り返した。また，連絡を受けた父親が上京し，同居した時には登校したが，帰京すると再び閉じこもってしまった。心理障害については，語らなかった。
Ⅵ　見え透いた理屈をつけて現実回避する自己中心的な行動と自己愛的な認識に対して〈もういい加減にしてくれ〉という，うんざりした気持ちが生じてきた。
Ⅶ　上司，父，医師／中断が繰り返された後，結局1年後に勤務日数の不足で退職となる／1年後に終了／1年後に退職